大谷大学真宗総合研究所

研究所報

No.40　　2002. 3. 29.

目次

「総合」ということ　1
2001年度「指定研究」研究組織一覧　2
2001年度「一般研究」選考結果発表　4
2001年度「指定研究」研究目的紹介　5
2001年度「一般研究」研究目的紹介　11
2000年度「指定研究」研究経過報告　14
2000年度「一般研究」研究結果概要　25
東洋大学井上円了記念学術センター・大谷大学真宗総合研究所共同研究「井上円了と清沢満之」　31
彙報　33

「総合」ということ

図書館長・教授　沙加戸　弘

大谷大学が総力をあげてその完成を目ざしてきた総合施設が、いよいよその全容を見せはじめた。

この施設は、従来の大谷大学の三部門すなわち図書館、学生研究室、真宗総合研究所に、博物館およびメディアホールの機能を併せ持つことになる。

しかしながら、この施設が「総合施設」と名付けられた所以は、当初から言われているように、単なる機能のよせあつめではない、というところにある。

ふりかえって、この総合施設の働きは、研究・教育・蓄積・交流である、と筆者は認識している。前三者の働きは従来から大谷大学の内容そのものとして充実が図られてきたところである。しかし、後一者の交流は大谷大学の歴史の中では、必ずしも十全とは言えなかった部門である。

広く問いかけ、よびかけ、関心の薄い学生の興味をよびおこし、という意識は、自分自身欠如していると思うことが多い。経緯は省略するがかなり以前、ある院生にいささか腹を立てて「宝の山に入って手を空しうして帰る者をひきとめる義務は持たぬ」と気障な科白を吐いた苦い記憶もある。

蔵の奥深く秘匿されたものは、個人の宝ではあっても世の宝ではない。世の人にその重要性が知られなければ、存在しないも同然である。してみれば、交流という働きは、前三者の機能と全く同じ重さを持つものであると言えよう。

今一点、この総合施設は前述の如く、単なる機能のよせあつめではない、という点を確認しておきたい。

文学は、ことばを以てする感動の表現とその営為である。感動の内容がどのようなものであれ、それがことばによって表現されたとき、我々はそれを文学とよぶ。

従って文学は、およそこの世に存在して人の五感に触れるすべてのものを、その素材として描く可能性を有している。まさに感動であるというただその一事によって、文学表現の主題となりうるのである。

一方仏教は、あらゆるものをその方法として流通する。時を待ち、機を得て仏教流通の縁とならぬものはない。

結果として、親鸞の和讃は真宗の聖教であると同時に、我国文学史上に燦然と輝く一大金字塔となった。ある部分が聖教であり、ある部分が文学、なのではない。聖教と文学と二つの側面を併せ持っている、という把え方にもやや弊がある。

全体が聖教として働き、全体が文学として存在しているのである。

大谷大学における「総合」ということばに求められている内容は、まさにこのようなあり方のなのではないだろうか。

大谷大学の真宗総合研究所にかけられた願いは、「能」である。総合施設の中に場所を占めること、言いかえれば「所」ではない。それも、大谷大学全体を研究所とする働きを牽引してゆく役割を果たすことである。

大谷大学自体を情報とし、大谷大学を世界に届ける、その働きの索引の役割が、今真宗総合研究所に求められている。

2001(平成13)年度「指定研究」研究組織一覧

研究班	研究名	研究課題および研究組織	
真宗学事研究 チーフ　延塚　知道	大谷大学近代史研究	研究課題	『大谷大学近代100年のあゆみ』の編纂
		研究員	延塚　知道（キャップ：教授・真宗学）
			木場　明志（教授・日本史学）
			門脇　　健（助教授・宗教学）
			一楽　　真（助教授・真宗学）
			宮崎　健司（助教授・日本史学・研究所主事）
			東舘　紹見（専任講師・日本史学）
		嘱託研究員	堅田　　理（本学非常勤講師）
			福島　栄寿（本学非常勤講師）
			平野　寿則（本学非常勤講師）
		研究補助員	中西　無量（本学大学院博士後期課程第３学年）
			安藤　　弥（本学大学院博士後期課程第２学年）
			上林　直子（本学大学院博士後期課程第２学年）
			橋本　　真（本学大学院博士後期課程第１学年）
	清沢満之研究	研究課題	『清沢満之全集』『清沢満之文集』の編纂
		研究員	神戸　和麿（キャップ：教授・真宗学）
			池上　哲司（教授・哲学）
			沙加戸　弘（教授・国文学）
			加来　雄之（助教授・真宗学）
			一楽　　真（助教授・真宗学）
		嘱託研究員	寺川　俊昭（本学名誉教授）
			久木　幸男（横浜国立大学名誉教授）
			今村　仁司（東京経済大学教授）
			藤原　正寿（真宗大谷派教学研究所所員）
			清沢　聡之（清沢満之自坊西方寺住職）
			田村　晃徳（本学非常勤講師）
		研究補助員	名畑直日児（本学大学院博士後期課程満期退学）
			中澤　明司（本学大学院博士後期課程第２学年）
			西本　祐摂（本学大学院博士後期課程第１学年）
	真宗教学研究	研究課題	『観経疏』の校訂・註釈
		研究員	小野　蓮明（キャップ：教授・真宗学）
			藤嶽　明信（助教授・真宗学）
			三木　彰円（専任講師・真宗学）
		嘱託研究員	山田　恵文（本学非常勤講師）
		研究補助員	橋田　尊光（本学大学院博士後期課程満期退学）
			本明　義樹（本学大学院博士後期課程第２学年）
国際仏教研究 チーフ　R F. Rhodes	国際真宗学研究	研究課題	近代教学思想研究
		研究員	Robert F. Rhodes（キャップ：助教授・仏教学）
			安冨　信哉（教授・真宗学）
			樋口　章信（助教授・真宗学）
			渡辺　啓真（助教授・倫理学）
			木越　　康（専任講師・真宗学）
		嘱託研究員	羽田　信生（毎田周一センター所長）
			Jan Van Bragt（南山大学名誉教授）
			Paul Watt（デポー大学教授）
			Mark L. Blum（ニューヨーク州立大学助教授）
		研究補助員	黒田　真慈（本学大学院博士後期課程第３学年）
	仏教・他宗教比較研究	研究課題	仏教とキリスト教の比較研究ならびに『教行信証』の独訳
		研究員	宮下　晴輝（キャップ：教授・仏教学）
			Albrecht Decke-Cornill（教授・ドイツ文学）
			門脇　　健（助教授・宗教学）
			木越　　康（専任講師・真宗学）
			三木　彰円（専任講師・真宗学）
			村山　保史（専任講師・哲学）
			吉田　孝夫（専任講師・ドイツ文学）
		嘱託研究員	寺川　俊昭（本学名誉教授）
			箕浦　恵了（本学名誉教授）
			片岡　　了（本学名誉教授）

研究班	研究名	研究課題および研究組織	
		嘱託研究員	大河内了義（本学名誉教授）
			多田　　稔（本学名誉教授）
		研究補助員	伊藤　恵深（本学大学院博士後期課程第1学年）
			岡本　敦之（本学大学院博士後期課程第1学年）
仏教文献研究 チーフ　荒牧　典俊	西蔵語文献研究	研究課題	北京版西蔵大蔵経総目録のデジタル化
		研究員	片野　道雄（キャップ：教授・仏教学）
			小谷信千代（教授・仏教学）
			白館　戒雲（教授・仏教学）
			兵藤　一夫（教授・仏教学）
		嘱託研究員	福田　洋一（東洋文庫研究員）
			三宅伸一郎（本学非常勤講師）
			Steven Hartwell（プログラマー）
		研究補助員	山田　哲也（本学大学院博士後期課程満期退学）
			長尾　重輝（本学大学院博士後期課程満期退学）
	パーリ語文献研究	研究課題	大谷大学所蔵貝葉写本Pannasajatakaの校訂・翻訳
		研究員	荒牧　典俊（キャップ：教授・仏教学）
			吉元　信行（教授・仏教学：所長）
			山本　和彦（専任講師・仏教学）
		嘱託研究員	長崎　法潤（本学名誉教授）
			田辺　和子（東方研究会研究員）
			畝部　俊也（日本学術振興会特別研究員）
		研究補助員	舟橋　智哉（本学大学院博士後期課程満期退学）
			清水　洋平（本学大学院博士後期課程第2学年）
	漢訳文献研究	研究課題	大谷大学所蔵稀覯漢文仏教典籍の調査と公開
		研究員	木村　宣彰（キャップ：教授・仏教学）
			一色　順心（教授・仏教学）
			織田　顕祐（助教授・仏教学）
		嘱託研究員	梶浦　　晋（京都大学人文科学研究所助手）
			釆睪　　晃（本学非常勤講師）
		研究補助員	藤谷　昌紀（本学大学院博士後期課程第2学年）
現代思想研究 チーフ　並木　　治	大谷大学FD研究	研究課題	大谷大学におけるFDの基礎構築
		研究員	並木　　治（キャップ：教授・フランス文学）
			寺林　　脩（助教授・社会学）
			藤嶽　明信（助教授・真宗学）
			織田　顕祐（助教授・仏教学）
			渡辺　啓真（助教授・倫理学）
			高井　康弘（助教授・文化人類学）
			川田　隆雄（助教授・メディア教育）
			Didier Wester（助教授・フランス語教育）
			藤本　芳則（助教授・幼児教育学）
			谷口奈青理（専任講師・臨床心理学）
			東舘　紹見（専任講師・日本史学）
			浦山あゆみ（専任講師・中国文学）
			浅若　裕彦（専任講師・英文学）
			吉田　孝夫（専任講師・ドイツ文学）
		嘱託研究員	岡田　伸夫（京都教育大学教育学部教授）
			石村　雅雄（京都大学高等教育教授システム開発センター助教授）
	大谷大学DB研究	研究課題	大谷大学におけるDBの基礎構築
		研究員	草野　顕之（キャップ：教授・日本史学）
			片岡　　裕（教授・情報工学）
			加来　雄之（助教授・真宗学）
			松川　　節（専任講師・人文情報学）
			山本　貴子（専任講師・図書館情報学）
			柴田みゆき（専任講師・コミュニケーション論）
		嘱託研究員	赤尾　栄慶（京都国立博物館主任研究員）
		研究補助員	箕浦　暁雄（本学大学院博士後期課程満期退学）

2001(平成13)年度「一般研究」選考結果発表

(A) 共同研究

研究代表者	研究課題および研究組織	補助金
織田　顕祐	研究課題　「金石文献による中国華厳宗の研究」 研　究　員　織田　顕祐（助教授） 一色　順心（教授） 河内　昭円（教授） 若槻　俊秀（教授） 大内　文雄（教授） 佐藤　義寛（助教授） 山野　俊郎（専任講師） 浦山あゆみ（専任講師） 嘱託研究員　竺沙　雅章（本学非常勤講師） 西尾　賢隆（花園大学教授） 今場　正美（本学非常勤講師） 松浦　典弘（大手前大学講師） 島津　京淳（本学非常勤講師） 宮井　里佳（日本学術振興会特別研究員）	140万円
佐賀枝夏文	研究課題　「大谷大学における社会福祉学の基礎構築に関する研究」 研　究　員　佐賀枝夏文（助教授） 吉元　信行（教授：所長） 大和　正克（教授） 松村　尚子（教授） 嘱託研究員　東　一英（愛知新城大谷短期大学教授）	190万円

(B) 個人研究

研究代表者	研究課題および研究組織	補助金
兵藤　一夫	研究課題　「唯識思想における有相と無相―特にゲルク派におけるもの―」 研　究　員　兵藤　一夫（教授）	90万円
山本　和彦	研究課題　「大谷大学におけるサンスクリット語授業のテキスト作成」 研　究　員　山本　和彦（専任講師）	90万円
山本　貴子	研究課題　「図書館システムの『資料組織演習』教育用ソフトウェアとしての有用性」 研　究　員　山本　貴子（専任講師） 嘱託研究員　高見　昌利（ナウカ㈱京都営業所）	60万円
井上　摩記	研究課題　「演劇的身体表現の動作特性から考える性別役割観と性自認が社会的行動へ与える影響―幼児教育科男女学生を対象に―」 研　究　員　井上　摩記（専任講師）	90万円

2001(平成13)年度「指定研究」研究目的紹介

真宗学事研究

大谷大学近代史研究
—『大谷大学近代100年のあゆみ』の編纂—

キャップ・教授　延塚　知道
(真宗学)

大谷大学は、1901年の清沢満之による真宗大学開学から数えて100周年という記念すべき年を迎える。『大谷大学近代100年の歩み』を刊行することは、これまでの歩みを確かめることを通して、今後の本学の向かうべき方向を確かめ直す機会となるはずである。

本研究班は、数年来日本近代の中における本学の歩みを確かめるべく、さまざまな史料の収集と整理を行ってきた。加えて、図書館に保管されていた学内の公文書を始めとする未整理史料の分類・整理も行ってきている。

本年度の研究目的は第1には『大谷大学近代100年の歩み』を刊行すること、そして第2に未整理史料の分類・整理することにある。

本年度は、100周年記念事業が目前に迫っており、『大谷大学近代100年の歩み』を2001年9月末に刊行するために全精力を注ぐ。具体的には校正作業が中心になるが、図版の掲載などについても同時進行していく。また刊行後は、これまでの学内外史料の整理を継続するとともに、史料のデータベース化をさらに進めていく予定である。

真宗学事研究

清沢満之研究
—『清沢満之全集』『清沢満之文集』の編纂—

キャップ・教授　神戸　和麿
(真宗学)

本研究は、2001年に迎える大谷大学近代化100周年を機縁として本学建学の原点を確認していくために、学祖・清沢満之の「全集」の編纂および「文集」の刊行などを研究目的とする。本研究は、本年度、以下の研究課題を推進する。

1．大谷大学編『清沢満之全集』(仮称)の編纂

昨年度は「清沢満之全集編纂委員会」会議を中心に大谷大学編『清沢満之全集』(仮称)の編集方針の検討を行った。全集に収められる資料の形式によって論文・講演編、随想・思索編など七編に分類し、それぞれを編年体として構成するなどの基本的方針が「清沢満之全集編纂委員会」によって承認された(詳しくは2000年度研究報告を参照)。今後、全集編集の方針について細かな検討をつめていく。また西方寺所蔵清沢満之自筆原稿によって全集所収の論文についての校訂作業を進め、全集刊行に備えることになる。また全集編纂の課題である全集収録予定で原本の所在が未確認の資料について昨年に引き続き調査・収集につとめたい。

2．大谷大学編『清沢満之文集』(仮称)の発刊

大谷大学編『清沢満之文集』(仮称)については、本年度、2001年10月13日の近代化100周年に向けて発刊する。『清沢満之文集』(仮称)案(詳しくは2000年度研究報告参照)に基づき、本学学生に広く読まれ、本学の建学の精神や清沢の信仰・思想にふれることができるものを目指す。

3．清沢満之論文集の編集

『全集』作成の準備として依拠本との校訂、読みの確定、脚注および解題の作成などを中心としてすすめているが、その成果を順次、参考資料などとあわせ、読みやすく、かつ研究ノート的な性格をもつものを公開していく。本年度は、『宗教哲学骸骨』『教界時言』『無盡燈』などについて準備をすすめる予定である。また今後は西方寺所蔵清沢満之自筆原稿である『有限無限録』『臘扇記』などの研究ノート作成も視野に入れていくことになろう。

4．西方寺所蔵清沢満之自筆原稿画像データベース

今年は西方寺所蔵の清沢満之自筆原稿デジタル画像をデータベースとして構築し公開していくための具体的な施策を検討し実施していきたい。これについては指定研究「大谷大学データベース研究班」と協力して推進していくことになる。

5．そのほか

(1)清沢満之の信仰・思想に関する研究会を開催。

(2)清沢満之関係資料の収集。

真宗学事研究

真宗教学研究
—『観経疏』の校訂・註釈—

キャップ・教授　小野　蓮明
（真宗学）

本研究は、昨年度までの「浄土真宗文献研究」を継続するものであり、浄土真宗を研究する上で不可欠とされる文献の研究、就中七祖聖教の公開に向けての資料収集と文献研究を行うことを目的とする。同時にまた、これらの研究と並行して、大谷大学においてあるべき「聖教」「聖典」とは何かということについて様々な角度から検討を加えていくこともその課題として、これまで研究を進めてきた。

七祖聖教の編纂・公開という課題においては、具体的にはまず善導の「五部九巻」のなかの『観経四帖疏』について、親鸞の「加点本」に基づいて、その本文・読み下し文、ならびに註を整える作業をこれまで継続して行ってきた。聖教の編纂ということにあたって、その作業の第一に『親鸞加点本・観経四帖疏』が取り上げられたのは、聖教編纂における具体的な作業手法を模索し確立していくという目的によってのことである。『観経玄義分』・『観経序分義』・『観経正宗分定善義』・『観経正宗分散善義』のそれぞれの巻について、「親鸞加点本」に基づく訓点を付した本文、それによる読み下し文、註を整えていく作業を、これまでにおおむね終えている。

昨年度はその4巻のなかから、特に『観経玄義分』に作業を集中し、返点・送仮名・左訓の確認作業を通して、テキストの確定を行った。また今後これらのテキストを公開していく場合に、どのような形体がふさわしいかということの検討も行い、試みとして本文・読み下し文・註を三段組にする作業も行った。

本年度は、昨年度までの研究成果を踏まえながら、さらに『観経玄義分』以下の3巻について、本文・読み下し文・註の確認を引き続き行いテキストの確定作業を進めていく計画である。その作業を通して、さらにこれまで行ってきたテキスト編纂の方針についても再検討を加えていきたい。

「聖教」「聖教」とは何かという課題について、これまで真宗大谷派における聖教刊行に関わる資料の収集整理を行ってきた。本年度も引き続きその収集を行っていく予定であるが、本年度は『親鸞加点本・観経四帖疏』のテキスト化に研究の主軸をおいて作業を進めていく計画である。

国際仏教研究

国際真宗学研究
—近代教学思想研究—

キャップ・助教授　Robert F. Rhodes
（仏教学）

本研究は、諸外国における仏教研究の動向を把握（受信）することと、国際社会に浄土教の思想研究を紹介（発信）することを通して、仏教研究を中心とした学術交流を実施することを目的としている。国際化された社会において、日本の精神文化の重要な構成要素の一つとなる浄土教思想を海外に紹介していくことは、きわめて大切な意味があるものと思われる。特に近年、国際社会において、親鸞思想への関心が高まっている。そのような状況の中、親鸞思想研究を国際レベルで紹介していくことは、きわめて重要な意味を持つものと思われる。

このような目的を達成するために、本研究班では主に二つの活動を行うこととする。一つは海外仏教研究の資料収集や国際シンポジウムなどへの参加、もう一つは代表的近代教学者の著作・論文を英訳し、その成果を出版し国際的に公表していくことである。

特に後者については昨年中に、浄土真宗を代表する4人の近代教学者、清沢満之・曽我量深・金子大栄・安田理深の論文のうち特に重要と思われるものの英訳をほぼ完了した。清沢については「宗教的道徳と普通道徳の交渉」・「我が信念」・「仏教者蓋何自重乎」、曽我については「地上の救主」「親鸞の仏教史観」「歎異抄聴記」、金子については「真宗学序説」、安田理深については「名は単に名にあらず」の計7本である。2001年8月2日～4日にかけて開催される第10回国際真宗学会大会（テーマは「Life in the Vow」）にあわせてこの成果を書物“Modern Shin Buddhist Thinkers”として編集し公開していくこととしたい。

また、来年度（2002年）には、この出版の成果をもとに近代教学を検証する国際シンポジウムの開催を計画し

ている。そのための準備研究をも同時に行っていきたい。

なお、今後の翻訳作業の継続として4人の近代教学者のうち特に清沢満之の著作の英訳を集中的に継続していく計画である。国際社会に近代真宗教学を紹介していく上で最も有効であると考えられる論文を検討したうえで、具体的に翻訳作業に移っていく予定である。

国際仏教研究

仏教・他宗教比較研究
—仏教とキリスト教の比較研究ならびに『教行信証』の独訳—

キャップ・教授　宮下　晴輝
(仏教学)

近年国際社会では、仏教における浄土教、とりわけ親鸞の思想への関心がとみに高まりつつある。このような状況を受けて、浄土真宗を中心とする仏教が国際社会の中でもちうる意味を、キリスト教を中心とする他宗教との比較を通じて把握することが本研究の目的である。

このような目的を果たすためには、浄土真宗とキリスト教における国際的な交流作業が不可欠であろう。具体的には、①従来必ずしも十分とは言えなかった、親鸞の諸著作のヨーロッパ語への翻訳作業、②研究者の緊密な相互交流、あるいはそうした相互交流の場の積極的な提供が必要となろう。

これまでの活動について言えば、①に関しては、すでに本研究班では親鸞の著作の中から『唯信鈔文意』のドイツ語への翻訳作業を終了し、*Yuishinshō-Mon'i* (*Erläuterungen zu Yuishinsho*), (Otani Universität, 1999) として公表した。②に関しては、1999年5月にドイツのマールブルク大学において開催された「第三回ルードルフ・オットー・シンポジウム」において、浄土真宗と福音主義神学を中心とする諸研究者によるシンポジウムを行い、シンポジウムの記録は、ドイツと日本においてそれぞれ、*Buddhismus und Christentum—Jodo Shinshu und Evangelische Theologie*— (EB-Verlag, 2000)、『仏教とキリスト教の対話—浄土真宗と福音主義神学—』(法蔵館、2000年) としてまとめられ、公表された。またこのシンポジウムを受け、2000年度には、マールブルク大学からミヒャエル・パイ、ハンス=マルチン・バールト、ゲルハルト・マルセル・マルチンといった三名の福音主義神学、宗教学の研究者を大谷大学へ招き、研究会を重ねた。

さらに今後の活動計画について言えば、①に関しては、『唯信鈔文意』に引き続き、親鸞の主著である『教行信証』をドイツ語に翻訳する作業に着手する。②に関しては、上述の大谷大学における研究会の記録を早急にまとめ、ドイツと日本からの同時出版を果たしたい。また国際的な学術会議への研究員の派遣を積極的に行い、とりわけ浄土真宗と福音主義神学の交流についてはこれを継続発展するため、三度目の対話として、新たなシンポジウム開催に向けての準備作業も始めたい。

仏教文献研究

西蔵語文献研究
—北京版西蔵大蔵経総目録のデジタル化—

キャップ・教授　片野　道雄
(仏教学)

大谷大学所蔵の西蔵語文献を整理・研究すると共に、貴重な文献を内外に紹介することを目的としている。そのために、チベット研究のパーソナルコンピュータ利用環境を促進する一環として、当研究班ではマッキントッシュ用のチベット語システム "Tibetan Language Kit for Macintosh" を開発した。現在、内外の多くのチベット研究者等に利用され、好評を博している。これまで、マッキントッシュのOSの改訂に合わせて当該チベット語システムも改訂してきたが、今後ともその作業は継続しなければならないであろう。

また、当該チベット語システムを利用して『北京版西蔵大蔵経総目録・索引』の電子化に取り組む。この総目録・索引（冊子体）は1962年に鈴木学術財団から出版されているが、すでに絶版となってから久しい。今回の電子化は冊子体のものをそのまま入力するのではなく、すでに完成している『大谷大学図書館蔵 西蔵大蔵経甘殊爾勘同目録』と『大谷大学図書館蔵 西蔵大蔵経丹殊爾勘同目録』の中から必要と思われる内容をも取り入れて、より利用価値の高い目録を作成することを目指している。本年度は次の二つについて研究を進める。

(1)西蔵大蔵経（北京版）総目録電子版のフォーマットを決定し、データの入力を行なう。

(2)パーソナルコンピュータ・マッキントッシュのOSのヴァージョンアップに伴い、チベット語システム“Tibetan Language Kit for Macintosh”のヴァージョンアップの作業に着手する。

仏教文献研究

パーリ語文献研究
—大谷大学所蔵貝葉写本 Paññāsajātakaの校訂・翻訳—

キャップ・教授　荒牧　典俊
（仏教学）

本研究は、大谷大学図書館に蔵されている東南アジア地域所伝の膨大な南方仏教貝葉写本（大谷貝葉）の中で、特に稀覯写本と思われる一連の『パンニャーサ・ジャータカ』（50のジャータカ）と言われるパーリ語文献群の体系的、文献的研究である。この50のジャータカのうち、大谷貝葉には26種類のジャータカが収められているが、すでに本研究所共同研究と文部省科研によって、そのうちの9ジャータカをローマナイズし、田辺和子博士将来のバンコク国立図書館所蔵のマイクロフィルムと照合し、そのTransliterationおよびその翻訳研究をほぼ完成することができた。本研究はその継続研究として、研究員、嘱託研究員、研究補助員及び内外の研究協力者の協力を得て、Transliterationを校訂版として完成させるとともに、まだ着手していない17ジャータカの校訂、翻訳、研究を実施し、学界に公開せんとするものである。

仏教文献研究

漢訳文献研究
—大谷大学所蔵稀覯漢文仏教典籍の調査と公開—

キャップ・教授　木村　宣彰
（仏教学）

本学は、寛文5年の学寮創設より一貫して仏教の研究と公開を使命としてきた。そして、その長い歴史を通して多くの仏教文献を収集してきた。その結果、本学は膨大な量の漢文仏教文献を所蔵している。それは、一応『和漢書分類目録』として整理されているが、現状の目録では、当該書物の書誌的な意味まで整理されているとは言い難い。例えば、目録上の分類によって貴重書と指定されているものでも、それがテキストとして貴重なのか文化的な意味で貴重なのかといったことは目録の上のみからでは容易に理解できないのである。また、本学所蔵の諸典籍は、これまでに様々な叢書の底本あるいは対校本として利用されてきた。しかし、その実態が必ずしも明瞭ではないために、『大正新脩大蔵経』などの中には、本学所蔵の文献によって校勘することでより学問的な信頼性が高まるものも存在していると考えられる。その他にもこれまで一度も活字化されていない文献や、未整理のものも数多くあると思われる。こうした現状を整理して、本学所蔵の稀覯漢文仏教文献を洗い出し、それを公開していくことが本研究の研究目的である。この事は、広く世界の学界に貢献することであり、仏教の公開を願いとする本学の重要な使命の一端であると考えられる。

その研究目的を達成するためには、まず本学所蔵の漢文仏教文献の中にはどのような貴重なものがあるかを調査しなければならない。従って、本年度の前半は、当該書の調査に専念する。具体的には、本学の『和漢書分類目録』を窓口としながら、「貴重書」に分類されているものの内容調査、本学所蔵文献を用いた翻刻の実態調査、『大正新脩大蔵経』に底本もしくは対校本として用いられたものの調査、目録で「漢写」とされているものの内容調査、などの作業を行っていく予定である。そして、これらの諸調査をふまえて、文献公開のための基本方針を検討するつもりである。おそらく公開の方法としては、特定の視点に立った目録の作成、活字テキストとしての翻刻、写真化あるいはデジタル画像化といったことが予想される。

本研究は、今年度から新たに始まったものであるが、上に述べたような諸点は、仏教系の他大学にも共通する問題である。その意味では本研究の目的をより広いところに伝えて共有する必要がある。このような点では、昨年度までの「大蔵経学術用語研究」が担ってきた対外的な役割も、これまでの経過をふまえながら、継続的に引き継いでいかねばならないと考えている。

現代思想研究

大谷大学FD研究
—大谷大学におけるFDの基礎構築—

キャップ・教授　並木　治
(フランス文学)

本FD研究班では、単なる教育技術向上のためのFDではなく、豊かな人間性の追求と育成に結びついた教育・研究を目指す本学に真に相応しい教育達成のあり方の研究を目指している。本学にあってはとりわけ、FDが一方通行的「補習」効率化や、そのための画一的教育技術的向上を指向するものであってはならないと考える。すなわち、「学びの共同体」という大学本来の基本的性格をここでいま一度確認するなら、教育・研究の場における真の出会いの豊かさや喜びをそれぞれの学生に具体的に実感させることによってこそ、本学の建学精神や学問的伝統も堅持されるはずであろう。大学がユニヴァーサル・アクセス段階をむかえた今日ほど、学生それぞれの資質に応じたそれぞれの達成感、心の触れ合いの中での学びの満足感、ひいては、学びの自信とコミュニケーション能力を獲得させる教育の方法が求められているときはないと言ってよい。教員と学生を、本学で共に学び、学び合うことによって知的に刺激しあえる構成員同士として捉え、教員と学生との、学生同士の、そして教員同士の、連帯と心のコミュニケーションこそがFDの基軸となるべきであり、またこうした視点を持つことによって、本学の建学精神に根ざした独自のFDを構築しうる具体的方向が明確になると考える。こうしたFDが、今後の本学のあり方そのものに関わる大きな意味をもつことは言うまでもない。この点を改めて確認しながら、研究成果を一つ一つ着実に積み重ね、来年度以降に想定される、FDの全学的展開にさまざまに寄与しうる建設的研究でありたいと思っている。

ともするとFDはトップダウン式に導入されることが少なくないが、本学ではいわばそうした上からの改革ではなく、教員の地道な教育実践をふまえた研究会方式によるFD構築の試みがここ3年間なされてきたわけである。われわれはこの、本学ならではの独自な方式の特徴を十分に生かしうる研究を行いたいと思っている。FD研究は、全教員の連帯・連携と表裏一体のものであるべきであり、そうした方向がその研究会方式自体に反映されていると考えられるからである。よって本FD研究においては、本学構成員の意識から遊離したものになることも、細かな技術研究に終始することも許されないと考えている。

今年度は、昨年度の研究活動の成果を引き継ぐ一方、ほぼすべての専門分野を網羅した14名の研究員と、学外でFDの第一線に立たれている2名の嘱託研究員の計16名によって研究班を組織することができた。これまで以上の広汎な研究活動を行いうる条件が整ったわけであり、それだけ責任の重さを実感する次第である。今年度は、学内外のFDに関する情報収集と分析に加え、授業活性化のためのより活発な意見交換と連携を求めてゆきたいと思っている。より具体的には、定期的に公開研究会を開催して、学生参加型授業の新たな工夫や可能性の研究、IT技術応用授業の可能性に関する研究、教員間の授業観察を含む情報交換をより活発に行ってゆくとともに、アンケート調査による教員意識実態調査実施と意識共有の試み、学外のFD研究とのより緊密な連携、FDに関わる研究・資料の収集等、FDをひろくコミュニケーションとネットワークの視点からたえず見直しつつ、授業活性化のための具体的施策の研究と、議論のさらなる積み上げを継続してゆく所存である。

現代思想研究

大谷大学DB研究
—大谷大学におけるDBの基礎構築—

キャップ・教授　草野　顕之
(日本史学)

大谷大学近代化100周年の記念すべき年に、大谷大学は総合施設（仮称）を立ち上げ、広く世界に向けての新たな情報発信を始めることになる。そのためにはこれまでの大谷大学の貴重な学的資産を、劇的に発展するデジタル化の世界に対応して活用できるようなデータベースとして構築することは本学の使命である。しかしこれまで個々の研究班や個人によってさまざまな資料のデータベース化が試みられてはいたが、全学的な視座をもってデータベース構築がなされてこなかった。本研究班では、大谷大学におけるデータベース構築の全学的な視野から

の検討とデータベース構築の具体的な実施、およびその公開方法についての検討を行う。

課題となるさまざまなデータベース構築については各研究員が分担して行う。また、全学的な取り組みが必要と思われるので、本研究員、嘱託研究員はもちろん、さらには学内の協力者をえて「大谷大学データベース構築に向けての研究会」を組織し、データベース構築についての課題を広く学内で共有していきたい。

昨年度の成果を踏まえ、本年度も学内の諸機関（とくに図書館)、研究所の諸研究班と協力体制を組みながらデータベースの構築を推し進めていく。あわせて研究所のホームページをもちいたデータベース公開も行う。本年度内に行う主なデータベース構築は以下の通り。

1　大谷大学図書館蔵貴重図書の目録作成
2　北京版西蔵大蔵経のデジタル画像データベース化
3　親鸞の真跡などの重要な文献のデジタル画像データベース化
4　清沢満之自筆原稿のデジタル画像データベース化
5　大谷大学所蔵標本（古印・封泥など）の擬似動画像による立体化とデジタル画像データベース化
6　その他

2001(平成13)年度「一般研究」研究目的紹介

共同研究

金石文献による中国華厳宗の研究

研究代表者　織田　顕祐
(仏教学)

唐代にほぼ完成した中国華厳宗の思想は、それまでに様々な形で展開した中国の仏教的思惟を総括し、以後の中国・朝鮮・日本の仏教の展開に大きな影響を与えた。その華厳宗の成立と展開については、従来仏教内の文献によって教理史的に研究するのが主な方法であった。しかしながら、仏教は人間の全体的な活動であると言えるから、それを人間の営みとして解明するためには、歴史的・社会的・時代的などの様々な角度からの解明が不可欠である。

このような視点に立って、昨年度は、主として杜順・智儼・法蔵周辺の洗いなおしに必要な文献を歴史資料の中から探索し、主なものの精読に務めた。特に則天武后時代の法蔵と外国三蔵との関係については、新たな視点を得ることができた。それを継続しながら、武后時代の他の宗派との関係、武后以後の天台宗・禅宗と澄観・宗密らの関係を社会的・歴史的な観点から洗いなおして、その時代に果たした華厳宗の役割や法蔵教学との同異を明らかにしたいというのが今年度の研究目的である。具体的には、以下の碑文を分担して精読する予定である。

①唐杭州霊隠山天竺寺大徳詵法師塔銘並序（皎然撰、全唐文918）
②清涼国師妙覚塔記（裴休撰、原碑拓本）
③釈大方広仏新華厳経論主李長者事述（馬氏撰、全唐文816）
④不空三蔵碑（厳郢撰、原碑拓本、金石萃編102）
⑤西山広化寺三蔵無畏不空法師塔記（裴度撰、金石萃編82）
⑥大唐西京千福寺多宝仏塔感応碑文（岑勛撰、原碑拓本、金石萃編89）
⑦唐国師千福寺多宝塔院故法華楚金禅師碑（飛錫撰、原碑拓本、金石萃編104）
⑧麓山寺碑（李邕撰、金石萃編78）
⑨『宋高僧伝』巻第六湛然伝（大正50）

これらのうち、①②③は華厳宗関係の文献である。これらを取り上げる理由は澄観の華厳教学の基本的な立場を明らかにしたいという点にある。④⑤は盛・中唐期の経典翻訳と澄観の関係を探るための資料である。⑥～⑨は澄観以前の天台宗の状況を知るための資料である。澄観という仏教者は、いろいろな意味で捉えにくい人であるが、これらの文献の精読を通して法蔵の華厳教学との基本的な立場の違いを明らかにしたいと考えている。

共同研究

大谷大学における社会福祉学の基盤構築に関する研究

研究代表者　佐賀枝　夏文
(社会学)

わが国の社会福祉専門職の養成は、大正10年4月に東本願寺社会課で行われた社会事業講習所主催、第一回社会事業講習会が仏教教団における嚆矢として輝ける伝統をもっている。本学文学部社会学科に開設された社会福祉学専攻は、その伝統を継承し、本学にふさわしい社会福祉学が構築されることが期待されている。当該研究の目的とするところは、社会福祉学の将来ビジョン、教育体系の充実などを総合的な見地から研究することを第一義とするものである。

研究の目的を遂行するために、社会福祉系教員を中心に関連教員の参加協力を要請して研究に着手した。当面の研究の取り組みとしては、定期的な研究会を開催して資料収集、討論をすすめていく計画である。研究課題として「福祉教育と資格問題」について今年度は、ガイドラインをまとめる方向で計画している。主旨と目的は、わが国の高等教育機関における社会福祉実践家の養成が、とかく資格取得に重きが置かれ、福祉教育が不在という問題を抱えている。本学においても時代に迎合し福祉教育不在の実践家養成では、開設された意義が希薄であることは明白である。建学の精神を伝統し、本学にふさわしい学問分野として育成される方向性を早急にとりまとめたいと考えている。研究員、嘱託研究員を中心に、

また、ゲストスピーカーを招聘して検討、議論を重ねていく計画である。テーマとしては、①仏教学と福祉、②社会科学と福祉、③福祉現場と福祉、④資格問題と福祉、⑤司法福祉と福祉、⑥臨床心理学と福祉のそれぞれの専門家からの提言をとりまとめていく作業を通して、ガイドラインをまとめて方向性を打ち出したい。

また、併行して行う研究課題と研究作業としては、当該分野の基盤の発掘である。明治にはじまる真宗大谷派の慈善事業は、近代日本のリーダーとして輝ける足跡を残している。その代表的なものとして監獄教誨事業、無料宿泊所、佛眼協会、大谷派保育協会（大谷保育協会）、大谷婦人法話会（大谷婦人会）などがある。これらの先輩の手がけた事業は、その情熱と活動に驚きと共に敬意を表すものである。また、これらの研究の成果と研究基盤の整備をすすめていく必要性がある。その理由は、事業や出版物が出されてから年月が経過しており、散逸したり足跡が不明となってきていることである。ついては、順次これらの調査研究をすすめていきたいと考えている。そのひとつとして、明治期に出版された雑誌の収集、復刻作業をすすめることも必要な時期とおもう。収集、復刻については、先輩の足跡を顕彰すると共に、広く公開していきたい。これらの作業を今年度に併行して行いたい。

個人研究

唯識思想における有相と無相
ー特にゲルク派におけるものー

研究代表者　兵藤　一夫
（仏教学）

唯識思想は形相を真実と見るか虚偽と見るかにより、大きく二つの立場に分けられる。いわゆる、前者が有相唯識、後者が無相唯識である。この有相・無相の立場の違いは、8世紀にシャーンタラクシタが両者を区別したことから明確化されるようになる。

ところで、この有相・無相はディグナーガやダルマキールティによって発展した仏教の認識論とも深く関係している。シャータラクシタも彼らに大きな影響を受けているのである。この有相・無相の問題はその後もインドの仏教認識論の中の主要な論点となり、活発な論議がなされている。

チベット仏教はシャーンタラクシタ以降のインドの仏教を忠実に受容している。その中で、ディグナーガやダルマキールティの認識論や論理学も伝えられたのである。中でも、ゲルク派の中観思想と認識論・論理学に関する受容と消化のレヴェルは高いものがある。先の有相・無相の論議も、チベットに伝えられ継承されている。したがって、インドにおける有相・無相の問題を研究するためには、チベットに伝えられ展開されているそれらの議論の内容を知ることは多いに有用である。

そこで、本研究ではゲルク派における有相・無相の捉え方の一端を明らかにすることで、インドの唯識思想における有相・無相を考察するための一助としたい。

個人研究

大谷大学におけるサンスクリット語授業のテキスト作成

研究代表者　山本　和彦
（仏教学）

本学での伝統的な授業のひとつにサンスクリット語の授業がある。毎年多くの受講生がおり、仏教学の文献研究を行う際の必修語学でもある。本学における授業では、G. Hart 著 A Rapid Sanskrit Method に基づいたオリジナルテキストを宮下晴輝教授が作成し、それを現在まで使用している。しかし、近年学生の基礎学力や学習意欲などに著しい変化が見られ、従来のテキストでは対応しきれなくなっている。現在の大学生には、非常に丁寧なテキストが必要である。テキストに出てくる名詞・形容詞すべての格変化と動詞の活用形を提示する必要がある。そのためには、現在使用中のテキストを大幅に加筆しなければならない。現在出版されている世界中のさまざまなサンスクリット語文法書を検討し、もっとも効率的に学習できるテキストを作成しなければならない。それによって、本学の学生のサンスクリット語の理解が深まり、文献講読の授業に活気がでるであろうし、その結果として、学生の卒業論文の作成も容易になるであろう。

個人研究

図書館システムの「資料組織演習」教育用ソフトウェアとしての有用性

研究代表者　山本　貴子
(図書館情報学)

平成11年度に行った研究では、コンピュータを利用した資料組織法の演習ツールを調査・分析することを目的とした。その際、目録データのコピー入力とオリジナル入力についての教育ができ、さらに、国際的にも通用するデータの作成が可能なシステムを選択することを主眼に置いた。設定した項目に合致したITS for Windowsを用い、上記の調査を行った結果、さらに、オンラインで典拠コントロールを行う調査も追加することが必要だと判断された。

また、国内外で使用されている図書館システムについて文献調査を行った際、世界的な傾向として、図書館を含む情報サービス機関では、WWW上のデータについて、目録に相当するデータ（メタデータ）を作成・流通させようとしていることが判明した。このメタデータの作成・流通システムは、1995年から開始されており、今年10月4日から6日にオタワで第8回国際ワークショップが開催されるなど現在も進行中である。国内でも、数大学がメタデータの作成を試行しており、今後の図書館界に多大な影響を与えることは間違いない。したがって、演習用ソフトウェアにもこのメタデータの演習を取り込む必要性が出てきた。

そこで、来年度の研究では、従来からある目録のみならず、メタデータの構築も含めた資料組織法の演習ツール（ITS for Windows）の有効性を検証することを目的とする。

個人研究

演劇的身体表現の動作特性から考える性別役割観と性自認が社会的行動へ与える影響
―幼児教育科男女学生を対象に―

研究代表者　井上　摩記
(体育学)

これまでの研究では演劇的身体表現に表れた男らしさ女らしさの動作特性と自分自身の動作特性を実験的に比較検討してきた。そこでは現代の若者は男女の性役割に昔ながらのステレオタイプ的な明確な境界線を引いていること、しかし、それは個人の行動の規範にはなっていないことが示唆された。

その結果にもとづき、今回の研究では身体表現の特性から考えられる個人の性別役割観と自分自身の性自認（ここではひとりの人間の内部にある男性的な部分と女性的な部分がどのようなかたちで存在しているのかを考える）が、現実の行動にどうのように反映されているのかについて調べていきたいと思う。

対象は短期大学幼児教育科に在籍する男女学生とする。幼児教育では従来、女性の分野であると認識されていたが、近年、男子の進出が顕著である。平成12年度より、これまでの「保母」の名称が「保育士」と改定される事に象徴されるように、今後その傾向はますます強まるだろう。幼児教育科に入学してくる男子学生も増加している。以前にも男子学生はおり、幼稚園・保育園へと就職していったが、男子の女性性が問題となることも多く、いわゆる女らしい男の子が多かったという。しかし、近年の学生は多様化し、また、受け入れる園側も求める男子像が変化してきている。女性の社会への男性の進出という極端な例ではあるが、幼児教育は個人の性自認にもとづく心理的状態が行動に表れやすい領域であると思われる。

具体的な研究方法（案）は

①幼児教育科男女学生の舞台上演劇的動作のフロアパターンと身体のフォルムを測定する。

②フロアパターンの結果から、個人がとらえている男らしさ女らしさをもとに尺度を作成し、自分らしい動きがどの位置にあるのかを数値化する。

③年2回の幼稚園実習時（6月・10月）に実習現場での子どもとの関わり合い方をビデオに記録し、遊びの種類・身体接触のパターン・言葉がけのパターンなどの分析を行う。

2000(平成12)年度「指定研究」研究経過報告

特定研究

大谷大学近代史研究 —大谷大学近代100年史の編纂と史料収集—

チーフ・教授　延塚　知道
(真宗学)

大谷大学は、京都高倉の学寮創設から、すでに330年余りの歴史を有する。しかしながら、1901年の清沢満之による真宗大学開学から数えるならば、来る2001年は、100周年という記念すべき年を迎える。それは単に100周年を祝うということではなく、100年の歩みを確かめることを通して、今後の本学の向かうべき方向を確かめ直す機会となるはずである。

考えてみれば、初代学長清沢満之は日本全体が近代化に揺れる中にあって、「本学は他の学校とは異なりまして宗教学校なること、殊に仏教の中に於いて浄土真宗の学場であります。」という宣言のもと、東京巣鴨に真宗大学を開学する。それは日本の近代化そのものを問い直すような眼に立ったものであると同時に、宗派内に閉ざされていた仏教（真宗）を人類に開放するという課題を担うものであった。

このような見定めに立って、本研究班では数年来、日本近代の中における本学の歩みを確かめるべく、さまざまな史料の収集と整理を行ってきた。また、図書館に保管されていた学内の公文書を始めとする未整理史料の分類・整理も行ってきた。これらの成果をふまえて、本年度は100周年記念事業の一つとして『大谷大学100年史』を刊行することに全力をそそいできた。

まず『100年史』の構成として、先に刊行された写真集『大谷大学近代100年の歩み』に基づき全体を6期に分け、それぞれに細かく章を立てた。そして、土台となる原稿を次の方々に依頼をした。

一郷正道、一色順心、大桑斉、小谷信千代、小野蓮明、神戸和麿、木村宣彰、草野顕之、寺林脩、藤島建樹、古田和弘、堀尾孟、宮下晴輝、安冨信哉、加来雄之、佐賀枝夏文、藤嶽明信、渡辺啓真、延塚知道、木場明志、門脇建、宮崎健司、一楽真、東舘紹見、堅田理、平野寿則、福島栄寿（順不同）

7月12日㈬には執筆者会議を開き、小川一乗学長から『100年史』発刊の意義について挨拶をいただいた後、100年史執筆に向けて大谷大学の史観を確かめるべく、歴代諸学長の挨拶文、論文等を読み合わせた。中でも柱としたのは、以下のものである。

清沢満之「開校の辞」、佐々木月樵「大谷大学樹立の精神」、曽我量深「大谷大学のあゆみ」、広瀬杲「浄土真宗の学場－人間の奪還を求めて－」

その後9月下旬から、各担当者より提出された原稿を元に、検討と編集の作業に入った。ただし、全体が出そろうまでにはかなりの時間がかかり、提出されたものから順次に最終の原稿化を進めた。

一方、これまでの史料収集と整理についても作業を併行して継続しなければならなかった。というのも執筆者から資料の提示が求められても既存のものだけでは十分に応えることができなかったためである。結果的には執筆作業の中で、資料についてもまとめておく必要性が強くなり、本文である通史編に加えて資料編も併せて編集することとなった。

これによって研究班は通史編と資料編の二つの作業を進めることになった。当初は2000年の内には完成原稿を作り、入稿する予定であったが、実際には2001年3月末まで原稿化の作業は続いた。ただし、2001年10月13日の100周年には刊行できる目途をつけるまでに至った。

特定研究

国際仏教研究 —諸外国における仏教研究の動向と展開の研究—

チーフ・教授　Robert F. Rhodes
(仏教学)

本研究は、諸外国における仏教研究の動向を把握することと、国際社会に浄土教研究を紹介することを通して、仏教研究を中心とした学術交流を目的とするものである。現代の仏教研究は、欧米社会などにおいて、方法論を含めて多様化しており、これらの海外における研究の動向を把握し共有することは、国際的な仏教研究を進めていく上で、必要不可欠である。また、近年の国際社会

において、浄土教、とりわけ親鸞の思想への関心が高まっており、国際社会に向けて浄土教の思想研究とその展開を発信し紹介することは、日本の精神文化を海外に伝えていく上で重要な意味を持つものであると思われる。そこで本研究は、海外仏教研究成果の受信と、本学および本研究所の仏教研究成果の発信を目的とし、以下の点から研究を進めてきた。

(1) 受　信

①海外における仏教研究書誌の収集。

②海外における仏教研究書誌デジタル・データーベースの構築。

③海外の仏教研究者を招聘して共同研究会を開催。

(2) 発　信

①近代真宗教学中の代表的論文の英語翻訳。

②キリスト教と仏教との対話研究およびその公開。

(3) その他

①韓国・東国大学との共同研究。「日韓仏教信仰比較研究—浄土教思想を中心として—」

②『教行信証』のドイツ語訳に向けての準備。

このような研究目的に基づいた2000年度の研究経過は次の通りである。

(1) 受　信

研究計画①・②に関しては、海外仏教研究書誌の収集とそのデーターベース化を、継続して作業中。③については、毎田周一仏教センター所長（USA）羽田信生氏を招き、近代真宗教学を英訳する上での問題点について、欧米における仏教研究の現状を踏まえながら研究討議した。

(2) 発　信

①清沢満之・曽我量深・金子大栄・安田理深の論文中、昨年度までに翻訳済みのものに加えて次のものの翻訳を完成した。

・清沢「仏教者なんぞ自嘲せざるや」

・曽我「歎異抄聴記」

・金子「真宗学序説」

・安田「名は単に名にあらず」

特に金子のものについては毎週翻訳検討会を開き、翻訳作業を進めた。また、安田のものについては翻訳者であるポール・ワット氏に加え羽田氏をオブザーバーとして招き、10日間にわたって集中的に翻訳検討会をすすめた。

②10月にドイツ・マールブルク大学より、ゲルハルト・マルセル・マルティーン博士（実践神学）マイケル・パイ博士（宗教学）を、さらに2001年3月にはハンス・マルティン・バールト博士（組織神学）を招き、それぞれの尊門分野でテーマを立て、公開講演会ならびに共同研究会を開催した。3氏共に1ないし2回の公開講演会をもち、コロキウムという形でそれぞれ2回程度の研究交流会を持った。

また、1999年5月にドイツにおいて行われたルードルフオットーシンポジウムの報告「仏教とキリスト教の対話—浄土真宗と福音主義神学—」を出版した。

(3) その他

①韓国東国大学と、共同研究会を、日本と韓国において各1回開催。

②2001年度より実際の翻訳作業にはいるため、資料収集等その準備にあたった。

研究の反省

近代真宗教学翻訳研究に関しては、若干の遅れがあるが、平成13年度中には、これまでそろった4氏代表論文8本の翻訳を「近代真宗教学アンソロジー」として出版の予定である。なお、本年度開催された翻訳事業をめぐっての研究会で、発信側の事情よりも受信側の事情を考慮した翻訳が必要であるいことが提言された。今後、当研究でどのような文献を翻訳していくべきなのかを含め、その方向性の見直しが迫られることになった。

・マールブルク大学との共同研究については、マールブルク大学より実践神学・組織神学・宗教学者を招聘することによって、キリスト教・仏教双方の思想的基盤となる諸項目について討議することが出来た。いまだ双方の基本概念の訳語の問題や、親鸞教学に対する認知度の低さに起因するとみられる思想の不理解が多く、更なる研究交流が必要であることが明らかになった。なお、本年度の共同研究会の記録については、大谷大学より出版の予定である。現在、整理中。

・韓国東国大学と大谷大学との共同研究の成果（論文）については、本年度中に発表予定であったが、次年度へずれ込むことになった。

以上、2000年度は主に近代教学の英訳とマールブルク大学神学部との共同研究に力を注いだ形となった。双方の研究の成果は2001年2002年度の出版事業によって報告してく予定であるが、海外仏教研究書誌のデジタルベースの公開や韓国との共同研究の論文化など、その他のこれまでの研究成果を積極的に公開にしていく事業にも今後着手しなくてはならない。

委託研究

清沢満之研究
—清沢満之全集の編纂と清沢満之文集の刊行—

チーフ・教授　神戸　和麿
（真宗学）

本研究は、2001年に迎える大谷大学近代化100周年を機縁として、本学における知的資産の公開の一端として、また本学建学の原点を確認していくために、学祖・清沢満之の「全集」の編纂および「文集」の刊行などを研究目的とする。とくに2002年6月6日の清沢満之100回忌に向けて全集を刊行し社会に提出していくことは、清沢満之のみならず近代日本における仏教、思想の研究に資する所少なくないと信じる。本研究班は、上記の研究計画に基づき、2000年度に以下のように研究を行った。

(A)大谷大学編『清沢満之全集』（仮称）の編纂

前年度の研究計画においても述べたが、清沢満之の全集については、これまで西村見暁氏による『清沢満之全集』全八巻（法蔵館）というすぐれた業績がある。しかし、今日では学術的な基礎資料として不十分な点も指摘されており、本学が学界や思想界に向けて、清沢満之研究の基礎資料として充分に堪えうる全集を新たに編纂することは本学の責務である。

2000年度は特定研究となった初年度でもあり、全集については研究目的にもとづき、「清沢満之全集編纂委員会」会議を中心に大谷大学編『清沢満之全集』（仮称）の編集方針の検討を行った。全集に収められる資料の形式によって論文・講演編、随想・思索編など七編に分類し、それぞれを編年体として構成するなどの以下の基本方針と構成案が「清沢満之全集編纂委員会」承認された。

■大谷大学編『清沢満之全集』（仮称）編集方針案

(1)底本に忠実な翻刻を目指す。

例：傍点や傍丸などもできるだけ忠実に翻刻することを目指す。

(2)学術的な全集を目指す。

＊校注、語注を付す。

＊難読の言葉にルビを付す。

(3)『全集』編集にあたって清沢満之関係資料を、以下の七つのカテゴリーに分類する。

Ⅰ　論文・講演録
Ⅱ　研究思索・随想録
Ⅲ　日記
Ⅳ　書簡
Ⅴ　ノート（自筆受講ノートなど）
Ⅵ　講義筆録
Ⅶ　関係資料

それぞれのカテゴリーのなかで発表の媒体・記録の形態などでまとめ、そのうえで編年体にて構成する。

(4)各編に解説を付す。各資料・論文に解題・解説を付す。

(5)ルビ、仮名、濁点、句読点、漢字の字体などについては今後検討。

(6)方針が決まったのち、出版社を決定する。

ただ全集編集の具体的方針については、形態、編集方針など今後さらなる細かな検討が必要である。

次年度からは西方寺の協力によって西方寺所蔵清沢満之自筆原稿（現在、ポジフィルム）による校訂が可能となるので、順次校訂作業を進め、全集刊行に備えたい。また全集編纂の課題であった、全集収録予定で原本の所在が未確認の資料について新たに何点かを収集することができたことも報告しておきたい。

(B)大谷大学編『清沢満之文集』（仮称）の発刊

大谷大学編『清沢満之文集』（仮称）については、2001年、近代化100周年に向けての発刊を目指している。2000年度中にどのような文章を収録するか、またはどのような参考資料（年表など）を付すかなど検討を重ね、以下のように『清沢満之文集』（仮称）案を作成した。

■大谷大学『清沢満之文集』（仮称）編集方針案

【目的】

近代化100周年記念出版
本学の学生に広く読まれるもの
本学における建学の精神の確認
清沢満之の人と思想の紹介（とくに求道・真宗大学に焦点をあてて）

【編集方針】

1．大谷大学『清沢満之文集』を手本にする。
2．上記をもとに、できるだけ手に取りやすく読みやすいものを目指す。
3．新漢字、新仮名遣い、読みの難しい副詞などはひらがなにする。難読語にはルビをふる。
4．解題、解説、小伝、略年譜などの付録を付す。
5．註（校注・語注）を付す。
6．略年譜、解題、解説、あとがきを付す。

これらは本学学生に広く読まれ、本学の建学の精神や

清沢の信仰・思想によって（人生において宗教がもつ根本的意味）にふれることができるものを目指すものとなろう。

(C)清沢満之論文集の編集

清沢在世中に出版された文章を中心に底本との校訂、読みの確定、脚注および解題の作成などを中心としてすすめ、その成果として研究が終ったものから順次、参考資料などとあわせ、読みやすく、かつ研究ノート的な性格をもつものを公開していく。これまでに『清沢満之『精神界』論文集』を刊行した。2000年度は、『宗教哲学骸骨』とSkeleton of Philosophy of Religionなどを収録した『清沢満之「宗教哲学骸骨」集』を作成することになったが、新たな資料の発見のため、発刊は多少、遅れることになった。

(D)西方寺所蔵清沢満之自筆原稿画像データベース

西方寺の協力によって、2000年度中に西方寺所蔵清沢満之自筆原稿の撮影をほぼ終えた。今後は、指定研究「大谷大学データベース研究班」と協力してデジタル画像データベースを作成していくことになる。

(E)そのほかの活動

(1)清沢満之研究班研究会の実施。

(2)清沢満之関係資料の調査（西方寺）。

(3)清沢満之の信仰・思想に関する研究会の開催。

(4)清沢の伝統に立つ近代真宗教学の関係の資料収集。（曾我量深自坊・浄恩寺など）

(5)東洋大学井上円了記念学術センターと大谷大学真宗総合研究所による共同研究「井上円了と清沢満之の研究」の研究会の実施。

これらの活動については本所報の彙報を参考にしてほしい。

委託研究

西蔵文献研究
—大谷大学所蔵の北京版大蔵経および蔵外文献の研究—

チーフ・教授　片野　道雄
（仏教学）

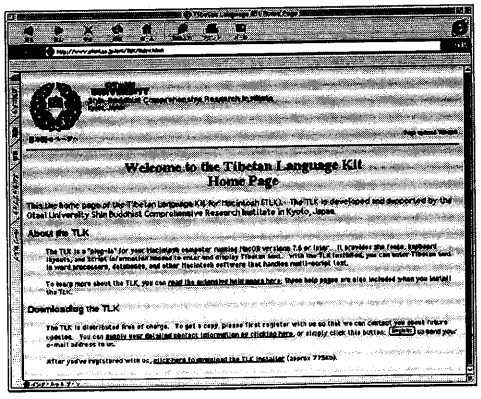
本研究は、大谷大学図書館が所蔵するチベット語文献を整理・研究すると共に、貴重な文献を内外に紹介することを目的にしたものである。2000年度はパーソナルコンピュータ・マッキントッシュ用のチベット語システムのヴァージョンアップ、そのシステムを利用した北京版西蔵大蔵経総目録の電子化を行った。

(1)パーソナルコンピュータ・マッキントッシュ用のチベット語システム Tibetan Language Kit for Macintosh（TLK）は、すでに内外のチベット研究者等に無料で配付され好評を博している。その理由として、このシステムはチベット文字としてコード化されているため、そのデータに汎用性があり、しかもチベット文字の入力が容易であるなど使用しやすいことによると考えられる。

ところが、マッキントッシュのOSとその機能拡張ソフトがヴァージョンアップされたことにより、TLKのヴァージョンアップが必要となったのでその作業に着手し、1999年度にTLKversion. 7.6としてそれが完成した。

そこで本年度（2000年度）は、これまでユーザーからの要望が強かったものであるが、インターネット上でTLKを紹介したり直接ダウンロードできるように、本学のホームページ上にTLKのサイトを開設することに力を注ぐことにした。その結果、2000年7月下旬に本学のホームページの中にTLK用のディレクトリー（http://www.otani.ac.jp/cri/TLK/）を設けることができ、それ以後、学内外からの利用に供している。

このTLK用のウェブページは嘱託研究員スティーヴ・ハートウェル氏が中心となって作成したもので、英語と日本語の二つの版からなっている。ページの表紙としては英語版を用いているが、表紙の中で簡単に日本語版に切り替えることができる。実際の最初のページ（英語・日本語版）は次のようである。



ページ作成に当たっては次の三点に留意している。

(i) TLKは大谷大学真宗総合研究所が開発・サポートしていることを明示する。

(ii) TLKの特徴、インストールや入力の方法を見やすく、分かりやすい形で紹介すること。その場合、チベットの研究者や専門家ばかりでなく、チベット語に関心の

ある初心者にも分かるように、チベット文字に関する簡単な解説も加えること。

(iii)TLKv. 7.6を当該サイトから直接ダウンロードできること。ただし、ダウンロードは無条件に認めるのではなく、少なくとも本人の電子メールアドレスの送付を求める。そして、今後のTLK の情報や案内を希望する者には、ページ上に用意した登録フォーマットによってユーザー登録をしてもらう。

なお、TLKのダウンロードの状況は、ウエブページ開設後の短い期間に200件以上のダウンロードがあり、その後も週に4、5件のペースで続き、2000年度末で合計300件を超えている。その中で、海外からのものは8割程度に上っており、今後もこの程度のペースでダウンロードが行われると思われる。

(2)北京版西蔵大蔵経総目録の電子化

TLKを利用したチベット語関連文献の電子化については、1999年度から北京版チベット大蔵経総目録の入力に着手した。基本的には現在の冊子体の総目録の内容に沿いながら、甘殊爾・丹殊爾勘同目録の中から必要な項目をデータとして追加する形で、電子版総目録のフォーマットを定め、1999年6月頃から北京版総目録のデータ入力を開始した。

2000年度も引き続いて、嘱託研究員福田洋一氏の指導の下、フォーマットの不具合な箇所を修正しながらそのデータ入力を行なった。入力は研究補助員を中心にしながら大学院生のアルバイトを加えて進められた。2000年度末には、北京版総目録の書名（チベット・サンスクリット・漢訳）、著者名の入力がほぼ終了した段階である。今後、著者名の統一やデルゲ等の他の版とのページ対照などを追加入力する予定である。

(3)学術講演会の開催

南インドに再建されたゲルク派のデプン寺ゴマン学堂の学堂長、ケンリンポチェ・ツルティム・プンツォク氏が来日中であったので、大谷大学にお招きして下記の要領で学術講演会を開催した。

日時：2000年11月14日(火)午後4時10分
場所：第五会議室（博綜館5階）
講題：「『現観荘厳論』と『善説金鬘』について」
講師：ケンリンポチェ・ツルティム・プンツォク氏
（デプン寺ゴマン学堂長）

講演は、チベット寺院における仏教の学習における『現観荘厳論』の重要さを、現代のゴマン学堂での仏教の学び方などと関連づけながら分かりやすく行なわれた。

委託研究

大蔵経学術用語研究
—『大正新脩大蔵経』経疏部関係典籍における学術用語の研究—

チーフ・教授　一色　順心
（仏教学）

本研究は、『大正新脩大蔵経』の学術用語の研究を通して、人類の貴重な知的文化遺産である仏教を広く世界に公開することを目的としている。今年度は、1998年度から3年計画で始められた、『大正新脩大蔵経』35・36巻に経疏部3・4として納められる諸典籍に関する研究の最終年度にあたる。本研究がその目的を達成するために取り組んでいる課題はおよそ次の3点である。第1は、既に述べたような、大蔵経の研究の結果である『大正新脩大蔵経索引』の点検見直し作業である。第2は、活字離れが進んでいると言われる現代の学生に大蔵経を開放するための方法を探ることである。第3は、大蔵経を社会に公開していくための一つの手段として大蔵経のテキストデータベースを構築することである。

第2と第3の研究課題に関しては、昨年度と一昨年度の研究経過報告において、その概略を紹介したので、ここでは今年度特に力を入れて進めた大蔵経のテキストデータベースの構築に関する現状を報告しておきたい。『大正新脩大蔵経』は、仏教研究の基本典籍として、国内外の仏教学者によって利用されている。近年の研究形態の急速な電子化に伴って、その電子化を求める声は日々大きくなっている。それらの声を承けて、従来より様々な形での電子化が試みられてきたが、それらは各々が独自の形で進めてきたために、統一が取れておらず、混乱が続いていた。数多くある問題の中でも、最も大きなものは、使用するコード体系と字体の問題である。

『大正新脩大蔵経』に最も多く用いられているのは漢字であるが、日本において最も一般的なShift-JISでは仏典中に用いられる多種の漢字をカバーすることができない。例えば、「智顗」の「顗」、「泥洹」の「洹」といった文字はShift-JISには含まれていない。また、漢字文化圏である台湾において用いられているBIG-5というコードでも、Shift-JISでカバーできない多くの文字を含んではいるものの、まだ仏典を完全に表記することが可能ではない。現在では、Shift-JISやBIG-5に含まれる文字

全てを内包したunicodeというコード体系も普及しつつあるが、未だ一般的と言える状況ではない。現在の状況の下でunicodeによるファイルを公表したとしても、利用を大きく制限することになってしまうであろう。もっとも、unicodeをもってしても、仏典中に出てくる文字を完全にカバーすることはできない。そこで、コード外の字をどのように表記するかという問題も出てくる。

また、漢字は、その特性上、多くの異体字をもつ。「仏」と「佛」などはその典型的な例であるが、いずれもShift-JISに含まれているのであるが、「教」と「教」などは後者は、Shift-JISには含まれていない。また、漢文に頻出する「者」字は、減画された「者」という字は各コード体系が含んではいるものの、unicodeにおいてすらユニークなコードを与えていないのである。また、電子計算機は、「仏」と「佛」、「教」と「教」などを同一の文字とは判断しない。電子化された仏典テキストの主たる用途が検索であると予想される以上、これらを統一する必要がある。各字体のシソーラス（同異対照表）を作成することも試みられてはきたが、「弁」字が「辨」「辦」「辯」など多数の字体（しかもこの場合は、意味すらも異なるのである）を含むものであることからも理解されるように、決して現実的な解決方法を与えてはこなかった。

しかし、最近になって、ようやく、これらが統一される動きが出てきた。現在、『大正新脩大蔵経』の電子入力は、方々の機関が入力作業を進めている。

最も大規模に進めているのは、台湾の中華電子佛典協會（ＣＢＥＴＡ：Chinese Buddhist Electronic Text Association）である。ここでは、『大正新脩大蔵経』第１巻～第55巻、及び第85巻に収められている全典籍を電子化し、インターネット（http://www.cbeta.org/）及びCD-ROMで配布している。ＣＢＥＴＡでは、単なるテキスト形式のみではなく、HTML形式、さらにこれを拡張したXML形式、またMicrosoft Windows環境でのHTML-Help形式での配布を試みている。

しかしながら、ＣＢＥＴＡでは、BIG-5にもとづいてテキスト化しているために、日本の研究者にはいくらかの限定を強いる。例えば、「衆」という字はBIG-5では「眾」という字になっており、しかもこれらはunicodeにおいても別の文字として別個のコードがそれぞれ割り当てられている。また、非常に短期間に入力したものであるために、校正が十分でなく入力ミスが少なからず存在し、新たな問題を引き起こしている。

また、天台宗典編纂所は、天台宗関係の典籍を入力した「天台CD-２」を発行している。この事業の中では、『大正新脩大蔵経』に限らず、『卍續藏經』に収められている典籍をも入力している点が大きく注目される。この事業の問題点としては、Shift-JISに含まれていない文字を一様に「★」で表記してしまっていることや、その性格上、天台宗関係の典籍に限定されていることなどが挙げられる。

我が国においては、東京大学を中心として「ＳＡＴ大正新脩大藏經テキストデータベース」（http://www.l.u-tokyo.ac.jp/~sat/japan/）というプロジェクトが進行している。このプロジェクトでは、日本の研究者に正確なデータベースを提供することを目的として進められているものである。このプロジェクトでは、Shift-JISをもとにしながら、同コードに含まれない字を諸橋轍次著『大漢和辞典』の親字番号や「今昔文字鏡」（http://www.mojikyo.gr.jp/）の番号に従ってユニークに与えている。現在公開されているファイルは、その典籍数こそＣＢＥＴＡに遠く及ばないが、入力ミスが極めて少なく、非常に良質なデータベースであるとの反響が海外の研究者からも寄せられている。本研究は、この「ＳＡＴ大正新脩大藏經テキストデータベース」プロジェクトに協力する形で進められた。

本年度は、昨年度に引き続いて、第47巻と第49巻に収められている典籍のデーターベース化を進めた。当初は、『大正新脩大蔵経』に付されている返り点や校注番号も入力していたのであるが、この作業が予想以上の時間を必要とするため途中で方針を変更して、これらの符号を削除した形での入力とした。

OCRソフトでの画像入力およびテキストファイル上の校正が終了したのは、以下の文献である。

【第47巻】

略論安樂淨土義（１巻）【後魏曇鸞撰】
安樂集（２巻）【唐道綽撰】
觀念阿彌陀佛相海三昧功德法門（１巻）【唐善導集記】
釋淨土群疑論（７巻）【唐懷感撰】
淨土十疑論（１巻）【隋智顗説】
五方便念佛門（１巻）【隋智顗撰】
淨土論（３巻）【唐迦才撰】
西方要決釋疑通規（１巻）【唐基撰】
遊心安樂道（１巻）【新羅元曉撰】
念佛鏡（２巻）【唐道鏡　善道共集】
念佛三昧寶王論（３巻）【唐飛錫撰】
往生淨土決疑行願二門（１巻）【宋遵式撰】
樂邦文類（５巻）【宋宗曉編】
樂邦遺稿（２巻）【宋宗曉編】
龍舒增廣淨土文（12巻）【宋王日休撰】
淨土境觀要門（１巻）【元懷則述】
淨土或問（１巻）【元天如則著】

廬山蓮宗寶鑑（10巻）【元普度編】
寶王三昧念佛直指（２巻）【明妙叶集】
淨土生無生論（１巻）【明傳燈撰】
西方合論（10巻）【明袁宏道撰】
淨土疑辯（１巻）【明袾宏撰】
讃阿彌陀佛偈（１巻）【後魏曇鸞撰】
轉經行道願往生淨土法事讃（２巻）【唐善導集記】
往生禮讃偈（１巻）【唐善導集記】
依觀經等明般舟三昧行道往生讃（１巻）【唐善導撰】
集諸經禮懺儀（２巻）【唐智昇撰】
淨土五會念佛略法事儀讃（２巻）【唐法照述】
往生淨土懺願儀（１巻）【宋遵式撰】

【第49巻】
迦葉結經（１巻）【後漢安世高譯】
迦丁比丘説當來變經（１巻）【失譯】
佛説比丘迦旃延説法沒盡偈百二十章（１巻）【失譯】
大阿羅漢難提蜜多羅所説法住記（１巻）【唐玄奘譯】
異部宗輪論（１巻）【唐玄奘譯】
十八部論（１巻）【陳真諦譯】
部執異論（１巻）【陳真諦譯】
歴代三寶紀（15巻）【隋費長房撰】
佛祖統紀（54巻）【宋志磐撰】（途中まで）

委託研究

浄土真宗文献研究
—善導の『五部九巻』の文献研究—

チーフ・教授　小野　蓮明
（真宗学）

本研究は、来る2001年の大谷大学開学100周年および2011年の宗祖親鸞聖人750回忌を視野におき、浄土真宗を研究する上で不可欠である文献の研究、就中七祖聖教の公開に向けての資料収集と文献研究を行うことを目的とする。

プロジェクト名「浄土真宗文献研究」は、蓮如研究プロジェクトの成果を継承し、七祖聖教の編纂に向けての資料収集と検討作業を行うべく1999年度に再出発した。具体的には、善導の「五部九巻」の中の『観経疏』について、「親鸞加点本」に基づきながら漢文・書き下し文・註を整える作業を進めている。

2000年度における検討作業として、１．「玄義分」の検討作業について。２．聖教刊行の資料収集ついて。３．聖教編纂に関する研究会について。という以上三点について経過を報告する。

１．「玄義分」の検討作業。

昨年度においては『観経四帖疏』（玄義分・序分義・定善義・散善義）の四巻について、「宗祖加点本」に基づいて、返り点・送り仮名・左訓等を手書きによって写し取っていく作業を概ね終了した。ただしこれらは不明個所などもあり、今後何度かの確認作業を必要とする段階のものであり、今年度はその確認作業を進める予定である。その確認作業においては、見落としなどを極力回避するために、数人でチームを組んで読み合わせを行うことによって進めていく。その読み合わせの作業においては、漢文部分だけではなく書き下し文・註の部分の確認作業も並行して行っていきたい。これらの作業は多くの時間と手間を要するものであるから、今年度の作業目標は「玄義分」に置き、そこに集中して作業を進め、テキストとしての具体的な様式を示せるところまでを目標とした。

テキストとしての具体的な様式の検討に際しては、そもそも誰がどのように用いる聖教ということを想定して様式を考えるのかという根本問題があらためて浮上した。この「読者は誰か」という問題について幾つかの考え方が検討された。しかし、この研究班で従来より問題とされている「聖教とは何か」という問題とも深く関連する事柄であり、結論を出すまでには至らなかった。そこでこの研究班では、「聖教とは何か」「読者は誰か」ということが将来確定されたときに対応出来るような基礎的なテキストの作成ということを念頭に置いて様式を検討した。具体的には、漢文編・述べ書き編・註篇という三部構成にする案とその三編を三段組にする案のサンプルが提示された。結論的には、後者の三段組として整える様式を今年度の成果として提出することとなった。上段は「宗祖加点本」に基づいての漢文、中段はその述べ書き、下段は註である。上段の漢文に関しては、これまで作成・点検してきた第一次原稿を複写して用いる方法も検討されたが、今回はひとつの様式の提示というところに重点を置くこととし、第一次原稿は今後のテキスト作成のところで活用されることが望ましいという結論に達した。

なお今回、テキストとしての様式を提示出来るよう「玄義分」に焦点を絞って作業を進めたのであるが、他の三巻（序分義・定善義・散善義）についても、「玄義

分」に引き続き順次テキスト化していけるよう作業を継続していった。

2．聖教刊行の資料収集。

前記の「聖教とは何か」ということに関わって、真宗大谷派において「聖教」はどのように扱われ、どのような形で刊行されてきたのかということについての確認が不可欠のこととなる。そのような視点から、本学図書館所蔵の関係資料の確認を行うとともに、『東本願寺史料』、「大谷派学事史略年表」（続真宗大系20所収）、『真宗典籍刊行史稿』（佐々木求巳著）等に基づいて、聖教刊行に関する略年表の作成を行った。収集した資料には『真宗仮名聖教』刊行の際の校訂の凡例を記録するものや、「浄土三部経」など「本山蔵版」校訂に関わるものも含まれており、当研究班の研究課題に大きな示唆を与えてくれるものであるが、本年度は「玄義分」のテキスト化を作業の中心に据えたこともあり、それぞれの資料に対する内容の確認と位置づけについては、今後さらに専門的な視点からの教示を踏まえながら継続する必要性がある。

3．七祖聖教に関する研究会。

本研究班では検討作業の実際において遭遇した様々な問題について広く意見交換が出来るようにと、聖教の編纂に関わられた講師を招いての研究会を開催してきた。今年度は、三月一日㈭の午前十時より、本願寺出版社編集の三栗章夫先生に「聖典の編纂について」と題して講演をしていただき、質疑応答の時間をもった。『浄土真宗聖典』（浄土真宗本願寺派発行）の編纂に携われた中からの具体的な講演は、本研究班にとって示唆に富むものであった。『浄土真宗聖典』は、門信徒が用いる聖典として注釈版と現代語版の聖典を作成していくという目標が明瞭に設定され、その上でそれら全ての大本になる『浄土真宗聖典　原典版』を善本に基づきながら先ず作成していくという手順を取られたのであった。そして、その編集作業を進めていく組織構成は、具体的に編集作業をする編集委員、真宗・仏教・書誌・歴史・漢文・国語・人権問題等に関する専門委員などを含めた大変大きなプロジェクトで編集作業が進められているのであった。また浄土真宗における聖典とは何かということに関するお話も、本研究班が常にぶつかる問題だけに大変興味深いものであった。これらの事項は聖教編纂に際しては充分に検討がなされなくてはならない問題であろう。本研究班が常に確認し続けていかなくてはならない重要な課題を再認識させられたことであった。聖典の編纂の具体的な作業を進めていくに当たっては、このような研究会の開催を通して、大谷大学としてあるべき「聖教」とは何かという、編纂の基本方針および方向性の明確化がなされなければならないであろう。

委託研究

大谷大学FD研究
—大谷大学におけるFDのあり方と授業活性化のための方策の研究—

チーフ・教授　並木　　治
（フランス文学）

FD（Faculty Developmentの略称）が意味する「（学部教員全体の）授業能力開発」研究は、今日の大学が社会から回答を求められている緊急の課題であるといってよい。質的にも、価値観のうえでも近年いっそう多様化しつつある学生たちに、大学はそれに相応しい内実をもった教育、段階的知的訓練と達成感、そして豊かな人間的成長の機会を提供しなければならない。それはいかに困難であっても、高等教育専門家としてのわれわれ教員に課せられた社会的使命であり責務である。そしてその目標実現のためのFD研究も、単に一部の教員が担いうる研究ではありえず、ひろく大学教員全体の連帯、また教員と学生との連帯意識や学びあい意識があってはじめて可能なものであると考えられる。本学に相応しいFDとは、単に教育技術の向上や補習授業のノウハウを研究することに甘んじるものであってはならず、あくまでも人と人との生きた関わりのなかで共に学びあい、成長しあうことを可能にするFDであり、一人一人の学生の資質に応じた学びの満足感と豊かなコミュニケーション能力を引き出すFDであろう。すなわち、学生それぞれの力ぎりぎりのところでじっくりと考えさせ、鍛えることが、また教員と共に学び合う喜びを実感させることこそが、ユニバーサル・アクセス時代をすでに迎えた今日にあって、本学独自の学問的伝統を堅持し活性化させるための基本戦略であるべきではなかろうか。

前置きが長くなってしまったが、2年目の「大谷大学FD研究」は、こうした基本的認識を研究班の全員で改めて確認・共有したうえで続行されたのであった。2000年度の研究員としては、1年目（1999年度）の寺林脩、織田顕祐、山本昌輝の諸氏に加えて、新たに高井康弘、浅若裕彦、川田隆雄、谷口奈青理、山本和彦の諸氏、嘱

託研究員としては前年度からの岡田伸夫氏（京都教育大学）に加えて石村雅雄氏（京都大学）に加わっていただいた。ほかに、前年度真宗総合研究所主事として、FD研究班のためになにかとご苦労下さった加来雄之氏に代わり、新主事の宮崎健司氏が研究活動に新たに参加された。また、研究補助員として、本学大学院社会学専攻博士課程を満期退学されたばかりの見義信香氏に研究班の補助的業務をお願いすることになった。研究全般のとりまとめ役のチーフは、前年度に引き続き並木治が務め、研究会の企画と学外FD活動との連携を中心にお世話をさせていただいた。研究班庶務は、前年度に引き続いて山本昌輝氏にお願いした。

前年と同様に、ほぼ月１回、ほとんど毎回３時間を越えるワークショップ式公開研究会での具体的な事例研究と議論が研究活動の中心であった。

各回のテーマと発表者、発表のおおよその内容は次のとおりである。

第１回（５月26日）

山本昌輝氏「授業への私の工夫」

山本氏が担当されている「教育学演習」（２回生対象の基礎講読）に関して、勉学意欲不足の問題や考える姿勢の欠如を指摘された後、教師の強い関わり方を基本としたさまざまな具体的工夫と成果を披露された。

第２回（６月15日）

高井康弘氏「社会学演習の現場」

社会学科の「社会学演習Ⅲ・Ⅳ」指導の具体的スケジュールと流れ、指導上の苦労や問題点について明らかにされた。前回の山本氏の工夫とはまた違った授業運営により学生の能力を引き出す手法を披露された。

第３回（７月７日）

石村雅雄氏「授業観察からFDへ」

FDの組織化と授業改善に有効な方法として、京都大学高等教育教授システム開発センターで長年取り組まれ、また内外の注目を集めている「授業観察」について、本学の米本、並木の両教員の授業撮影ビデオをもとに、具体的に報告された。またこれとの関連で、公開実験授業の試みについても話された。

第４回（９月29日）

谷口奈青理氏「多人数講義における問題点」

学生の参加度の低下、学生間の知的関心の格差、教師と学生とのコミュニケーションの困難といった全般的傾向と、それを乗り越えるための工夫について、最近見られるFDの傾向と問題点をふまえながら報告された。

第５回（10月20日）

山本和彦氏「第１学年の授業における問題点―人間学１と仏教学演習１―」

１回生対象授業の諸問題について、３回生・４回生対象ゼミの現状と問題との関連で指摘され、さまざまな工夫と成果を発表された。また、サンスクリット語授業の現状についても、ひろく仏教学研究の視点から報告された。

第６回（11月17日）

浅若裕彦氏「英語の授業における問題点」

現行の英語授業の問題点と、習熟度別クラス編成実現に向けての取り組み、今後の展望について、本学の外国語学習全般にわたる根本問題をふまえながら具体的に論じられた。

第７回（12月１日）

石村雅雄氏「大学での学生の学びについて：大学生の学力低下問題を手がかりにして」

前回の報告での授業活性化の問題から展開され、最近問題となっているいわゆる「学力低下」論を新たな見地から見直す提案をされた。大学での学習内容・方法の継続、学習意欲・態度の継続を可能にするサポート態勢について、独自の視点から具体的に論じられた。

第８回（12月22日）

この日の研究会では、第１外国語と第２外国語がかかえる諸問題と改善策について、それぞれの担当者の立場から、別個に語っていただくこととした。

ディディエ・ヴェステル氏「大谷大学におけるフランス語（第２外国語）について」

大谷大学の第２外国語教育が担うべき積極的意義と、本学の学生に特徴的な実態について発表された。課外授業の試みや翌年度に向けての新たな取り組みについても報告された。

岡田伸夫氏「What to Teach and How to Teach―授業改善模索中―」

京都教育大学で担当されている基礎英文法実習授業での学生の意欲的姿勢と、それを喚起するのに求められる工夫について語られた。課題発見・探求能力の育成の問題にもからませて、現状さらに改善するために継続されている模索について報告された。

第９回（１月26日）

川田隆雄氏「『ユニバーサルアクセス時代』の大学教育―構成主義教育とIT技術の融合―」

大学大衆化状況がさらに進んだ段階として、マーチン・トロウのいうユニバーサルアクセス時代において大学教員に求められる根本的意識改革と、新たな局面

に対応しうる「構成主義教育」とは何かについて、ITの具体的利用法を軸に報告された。

第10回（2月26日）

岡田伸夫氏「教師と学生の trading relation」

前回の報告をふまえ、教師と学生のあるべきチームワークづくりのためには従来の「教育」の枠を越えた独自の発想が求められていることを、英語読解授業のあり方の問題と関連して具体的に提言された。

以上が研究会でのそれぞれの報告のきわめて大まかな報告であるが、それぞれの話題提供に続き、毎回率直で熱のこもった議論が長時間にわたり交わされた。これらの議論をここで具体的に報告する余裕はないが、それらはいずれもきわめて刺激に溢れるものであった。

このほかに、われわれは「大学コンソーシアム京都」の「FDフォーラム」や「FDセミナー」等の催しにも研究成果による協力を行った。いささか手前みそになるが、前年度に引き続き研究チーフがコーディネーターを務めさせていただいた「FDフォーラム」第1分科会「教員の意識改革と授業改善」には、その立案と構想に本研究班の日頃の問題意識と研究成果が大いに生かされた。そのためか、いくつかの分科会のなかでもとりわけ多くの参加者を得ることができた。

幸い本研究は前年度に引き続き2000年度においても私学振興事業団から補助金を得ることができ、基礎的研究条件や資料等をいっそう整えることができた。今後も心のコミュニケーションを軸とした大谷大学らしいFDの進むべき方向をしっかりと見極めつつ、本研究をより広汎で実り多きものとなるようさらに一歩一歩着実に継続しなければならないと考えるものである。

委託研究

大谷大学データベース研究
—大谷大学におけるデータベース構築の基礎研究—

チーフ・教授　草野　顕之
（日本史学）

本研究は、大谷大学におけるデータベース構築の全学的な視野からの検討とデータベース構築の具体的な実施、およびその公開方法についての検討を行うものである。

本年度は、データベース構築の根幹を為すデジタル画像の制作に向けて、研究及び実作業を以下のように行った。

【スキャニング作業】

草野・片岡・松川各研究員の指導のもと、研究補助員（箕浦）とアルバイト4人が、清沢班が西方寺にて撮影してきた35ミリポジフィルム50本の移管をうけて、スキャニング作業を行った。前期の大部分は、新規導入した高精細スキャナーであるジェナスキャンFT-S5500（大日本スクリーン）によるスキャニングの調整作業に終始した。これは、スキャニングの際に正確な色調整を行うため、片岡・柴田研究員によって開発されたグレースケールを利用してのRGB曲線の調整方法を確立するための作業に時間がとられたためである。9月段階でその調整方法がおおよそ確立されたので、その手順にしたがって、50本のフィルムのスキャニングを行った。また、『臘扇記』の冒頭部分を撮影した1本はCD-ROMに焼いて、西方寺に提供した。

【図書館蔵貴重書撮影作業】

図書館1階の作業室に、高精細画像撮影用のカメラ一式・撮影台一式・ストロボ一式を購入し、セッティングを済ませたうえで、カメラとストロボの調整作業を行った。フィルムの選定・撮影面の露光ムラ除去のためにテスト撮影を行い、撮影されたフィルムをスキャニングしてデジタル化し、精度を評価するという作業を繰り返したため、この調整作業にも予想以上の時間をとられたが、年度末になって、フィルム撮影→スキャニングによるデジタル化という一連の作業を十分な精度をもって行う手順を確立することができた。

【学内研究会活動】

作業と並行して、研究員・補助員・アルバイトが意見を交換することを通して個々の作業についての理解を共有するために、同時にデータベース研究班の研究内容を広く学内に知っていただく目的で、学内公開研究会を以下の日程で開催した。

第1回　5月10日(水)18：00　於：第3会議室
「大谷大学データベース研究班の課題」片岡裕

第2回　6月16日(金)17：50　於：第4会議室
「人文科学研究におけるデジタルデータの活用」松川節

第3回　7月7日(金)17：50　於：尋源館会議室

「書誌データベースの基礎知識」山本貴子

第4回　11月17日(金)17：50　於：第5会議室
「デジタル画像作成の現状と課題」箕浦暁雄

第5回　12月22日(金)17：50　於：第4会議室
「デジタル画像作成の諸問題」片岡裕

【学外研究活動】

スキャニング作業における明度と色調を補正する画期的方法について、片岡研究員が以下の学会発表を行なった。

片岡裕「Hi-Fiデジタル画像の作成：明度と色調の1段階での補正法」
於：「人文科学とコンピュータシンポジウム」12月16日、立命館大学アカデメイア立命21。予稿：『人文科学とコンピュータシンポジウム論文集』pp. 207-214.（情報処理学会シンポジウムシリーズ Vol. 2000, No. 17 所収）

【来年度に向けて】

デジタル画像のスキャニング作業については作業工程のルーチン化が完成したので、今後は西方寺蔵の清沢満之自筆本のデジタル画像化、図書館蔵貴重書（北京版西蔵大蔵経など）のデジタル画像化を進めていく。図書館蔵貴重書の撮影作業については、北京版西蔵大蔵経を始めとし、随時他の貴重な文献の撮影も行っていきたい。また、目録データベースについては、図書館蔵貴重書目録データベースの作成に向けて、山本研究員を中心にして検討を重ねていきたい。

2000(平成12)年度「一般研究」研究結果概要

共同研究

20世紀前半期中国東北地域における宗教の総合的研究

研究代表者　木場　明志
(日本史学)

本研究は前年度採択の同名課題の研究について、なお継続して研究を行ったものである。前年度には、国内での研究基盤の整備を目指し、本課題に実績を持つ研究者を順次に学外から招き、本研究学内研究員との研究会を7回開催した。また、中国東北師範大学との研究協力を進める上から、同大学の研究協力者を招いて2回の研究会を行ってきた。

以上を踏まえて、本年度は当初の計画通り、東北師範大学との共催による共同研究会の開催を目指して年度初めから企画を練った。その結果、本学提携校である東北師範大学の史寧中学長をはじめとする関係教員の積極協力が得られ、9月上旬に同大学を会場に学術交流共同研究会を開催することができた。大谷大学からは本研究班の5名の研究員（藤島建樹、河内昭円、木場明志、桂華淳祥、李青）が参加した。以下に、その日程と研究会の概要を報告する。

大谷大学・東北師範大学　学術交流共同研究会
期日　2000年9月6日～7日
会場　東北師範大学
研究会テーマ　20世紀前半期中国東北地方における宗教研究の基礎的課題
日程　第1日　9月6日(水)
10時～12時
報告1「東北地方の宗教研究の課題」
大谷大学史学科教授　木場明志
(報告終了後、質疑応答)
参加者　東北師範大学教員7名
同　大学院生23名
大谷大学教員5名
司会　逢増玉教授
通訳　林　嵐助教授
15時～17時
報告2「日本仏教と植民地侵略」
東北師範大学中文系教授　呂元明
(報告終了後、質疑応答)
参加者　東北師範大学教員5名
同　大学院生10名
大谷大学教員5名
司会　木場明志
通訳　金鳳花
第2日　9月7日（木）
9時15分～11時30分
報告3「満洲文壇の一考察―“藝文志派”を中心に」
大谷大学国際文化学科助教授　李青
(報告終了後、質疑応答)
参加者　東北師範大学教員7名
同　大学院生8名
大谷大学教員5名
司会　木場明志
通訳　なし（中国語で発表し、日本文のレジュメを用意）
報告4「偽満時期日本帝国主義利用仏教侵華問題」
東北師範大学歴史系教授　王魁喜
(報告終了後、質疑応答)
参加者　報告3に同じ
司会　木場明志
通訳　周頌倫
14時～17時
実地見学　・旧東本願寺満州別院（現在は第2実験中学校食堂として利用中）
・東北師範大学新キャンパス

両日を通じて、両校教員ほか多くの大学院生の参加があったことが特記されよう。報告の個々についての質疑は極めて活発で、すべてを侵略に帰結させる中国側意見と、侵略に帰結することは同意するが、そこに至る過程の解明にこそ意味があるとする日本側意見との違いは鮮明であった。友好的雰囲気のなかにもお互いに譲らぬ場面があったが、中国側が日本側に一定の理解を示し、今後は中国人が愛国意識や民族意識を持ちながら日本帝国主義によって売国者に変貌させられていく過程にも注意をしたいとしたことに進展があったように思う。日本側は、当時の中国の国情への理解をより進め、日本宗教（仏教、神道、新宗教など）および中国在来の様々な宗教（中国仏教、ロシア正教、イスラム教、ラマ教、サマン教など）の様相について、より具体的かつ総体的に調

査研究を続ける必要があると痛感させられた。

また、上述の共同研究会に先立ち、研究員の木場、桂華の2名は9月4日～5日の2日間にわたって東北師範大学図書館、長春市図書館、吉林省図書館、満鉄資料館に資料調査に赴いた。いずれも東北師範大学教員が付き添い、同教員の紹介によって資料の閲覧と複写に多大の便宜を得た。外国人は資料の閲覧と複写にはなはだ不自由を余儀なくさせられるところを、資料調査と収集についてこの上ない協力をして戴いた。おかげで、日本の復刻出版では欠けたところがある『満州年鑑』についても記事複写ができ、宗教関係記事が逐年で揃ったことは何よりも喜ばしい成果であった。ほかにも、簡単には複写が許されない図書館文献や、遠くハルビン市図書館まで行かないと入手できない文献も、東北師範大学の教員や元大谷大学留学生の手によって後日に日本に送られて来るという協力を戴いた。これらによって、少なくとも、当該研究に関わる中国側の研究状況を示す論文についてほぼ調査を終えることができた。あとは、東北地域内に広がる各図書館が所蔵する文献資料をできる限り調査し、そこから宗教関係の資料をさらに収集していく作業が残された。

2年間にわたる当該研究において、国内研究基盤の整備と東北師範大学の研究協力確約を得ることができた。これによって中国東北地域資料の調査、収集と研究の見通しが明確になったことであり、。今後は、機会を作って東北地域各地を訪ね、本格的に資料調査と収集にあたりたい。

共同研究

金石文献による中国華厳宗の研究

研究代表者　織田　顕祐
（仏教学）

中国の華厳宗の教学は、唐代の賢首大師法蔵によって大成された。それは、様々な形で展開した中国の仏教的思惟を総括し、以後の中国・朝鮮・日本の仏教の展開に大きな影響を与えた。その華厳宗の成立と展開については、従来仏教内の文献によって教理史的に研究するのが主な方法であった。しかしながら、仏教は本来、人間の全体的な活動であるから、その全体像を解明するためには歴史的・社会的・時代的などの様々な角度からの研究が不可欠である。

本研究は、そうした発想に基づいて、中国華厳宗の思想的な展開を、仏教外の歴史資料とも言うべき金石文などによって解明しようとするものである。例えば、大中6（852）年に作られた「杜順和尚行記碑」という碑文が存在するが、それは華厳宗初祖の杜順（557-640）の行状を顕彰したものである。碑主の杜順滅後相当の時間がたってから作られたものであり、その歴史的社会的な背景と内容を明らかにすることによって従来の華厳宗の祖統説をめぐる諸問題に一定の方向付けができるものと思われる。その他に、法蔵が武周期にどのような活動をしたか、また澄観の社会的な立場など、華厳教学内の資料からは見ることのできない面を確認するのが本研究の目的である。そのための基礎作業として、以下の諸文献の解読を共同で行った。

①大唐華厳寺杜順和尚行記（杜殷撰、金石萃編114）
②大方広大荘厳経序（武后撰、普寧蔵、全唐文97）
③大周新訳大方広仏華厳経序（武后撰、大正10、全唐文97）
④新訳大乗入楞伽経序（武后撰、大正16、全唐文97）
⑤大宝積経序（睿宗撰、大正11、全唐文19）
⑥大宝積経述（大正11）
⑦三蔵聖教序（武后撰、全唐文97）
⑧三蔵聖教序（中宗撰、全唐文17）
⑨大唐大薦福寺故大徳康蔵法師之碑（閻朝隠撰、大正50）
⑩円測法師仏舎利塔銘（宋復撰、金石萃編146）
⑪基公塔銘（李弘慶撰、金石萃編113）
⑫唐故白馬寺主翻訳恵沼神塔碑並序（李よう撰、卍続1-95-4-90）

これらのうち、①は、華厳宗の初祖とされる杜順の碑文である。この碑文は上にも述べたように、杜順滅後およそ200年を経て造られたものである。この時代は会昌の廃仏後の復仏が盛んな頃であり、この碑と宗密の碑とは同じ刻者によって製作されていることが明らかになった。これが何を意味するか更に検討を深めていきたい。②から⑧までは、武周期の経典翻訳の隆盛と法蔵との関係を探るための資料である。⑨は、法蔵滅後直ちに造られたものであり、法蔵の伝記に関する一次資料である。これらによって、法蔵と則天武后の想像以上に深い関係が明らかになった。法蔵は、則天武后が太原寺を立てたときそこで出家し、後半は、勅命によって提雲般若・実叉難陀・菩提流志・義浄らの訳場を変転した。これらの経典翻訳事業は、時の皇帝の権威発揚と深く結びついて

おり、法蔵がそうした社会的な事情と深く結びついていたことが読み取れるのである。法蔵は決して出世間にのみ住していた教学者ではなかったのである。こうした点は今後更に深く解明しなければならない問題である。なお、これらの文献の調査研究を通して、武周期の仏教の特徴的なあり方、またそこに活動した特定の仏教達との関係を解明することが、法蔵の華厳教学の背景を明らかにするための有力な手がかりであることが明らかとなった。この点も今後の研究課題としたい。⑩⑪⑫は、華厳教学と関係の深い法相宗の主な教学者の碑文である。これらのうち、円測と慧沼は法蔵と同じように訳場で活躍した人であり、必ずや法蔵と直接の面識があったに違いない。これに対して基は、玄奘の訳場以外には参加しなかったようである。そして、法相宗の教学系統から見てこの三者は微妙な関係にある。円測は基によって異端扱いされて法相の伝統からはずされ、一方慧沼は基の直系として考えられてきた。しかしながら、両者は意外と近いところで活躍していたのである。法蔵が『五教章』や『起信論義記』『探玄記』を書いて性相融会を説いたのは、これらの人々と出会う前、つまり彼の生涯の前半期であり、その後の彼の思想は一体どのように展開していったのだろうか。従来、これらの前半期の書疏を法蔵の代表的著作として扱って来たが、こうした伝統的な法蔵観に疑問を持たざるを得ないのである。なお、⑫の慧沼碑の検討段階で、現在我々が基本テキストとしている『続蔵経』版には長大な欠落が存在することが明らかになった。幸い続蔵経の底本が『法隆寺一切経』に存在するので、それを翻刻して基礎資料として活用できるようにしたいと考えている。

個人研究

『深遠な空性の真実を明らかにする論書・幸いなる者の開眼』の研究・翻訳

研究代表者　白館　戒雲
（仏教学）

本研究の成果としては研究対象であるZab mo stong pa nyid kyi de kho na nyid rab tu gsal bar byed pa'i bstan bcos sKal bzang mig 'byed『深遠な空性の真実を明らかにする論書・幸いなる者の開眼』、略称sTong thun chen mo『千薬大論』のうち、ほぼ前半に相当する部分（lHa sa editionにてka 1b-106a1.ただしfolio 56と97には重複がある）の和訳と研究を、藤仲孝司氏との共著『ツォンカパ 中観哲学の研究Ⅲ』（京都2001年2月20日　文栄堂　以下『研究Ⅲ』と略称する）として発表することができた。さらにこの『研究Ⅲ』には序文として、原著者ケードゥプ・ゲレク・ペルサンポ（mKhas grub rje dGe legs dpal bzang po. 1385-1438）の伝記研究、彼に始まるパンチェンラマの系統に関する小論、そして因明の問答法に関するrJe dMu dge bsam gtan rgya mtshoの論文の翻訳（仏教論理学の表現法は本論や他の論書に見られ、現代の読者にとって馴染み薄く研究上障害になりやすい。この現在のアムド・タシキル最後の大学者の全集第六巻gSung 'bum pod drug pa（青海民族出版社1997）よりTshad ma rig pa'i dmigs bsal gyi brjod tshul 'ga' zhig gi dris lan『因明の特殊な表現方法　いくつかの問答』）を付け加えた。さらに索引として引用文、経論や人名、固有名詞の名とともにおもな用語、用例の一覧を付け加えた。

参照したテキストは基本的にはlHa sa zhol edition（ラサ版　Hと略称する）である。これは筆者がかつてデシャル村（sDe shar）の寺院にて法主ペルデンより形見として拝領したものであり、もとは原著者ケードゥプ・ジェ自身が研鑽された本山ガムリン寺（Ngam ring）のものである。かなり古く希少な刊本であり、撮影して巻末に掲載したが、正確な出版年代は不明である。また現在利用可能なものとしてlHa sa zhol edition（Dharmsala 1981）とbKra shis lhun po edition（タシルンポ版New Delhi: Ngawang Gelek Demo 1983）との二つがあるので参照した（1972年にMādhyamika Text Series Vol. 1 (ed. lHa mkhar yongs 'dzin bsTan pa rgyal mtshan: New Delhi 1972)に収録されたものはラサ版と同一である）が、この新しいラサ版は所々で、元のペチャの印刷の不明瞭な部分を加筆補正しており、その加筆補正には恣意的で不正確なものも見られるので、気づいた部分は『研究Ⅲ』の註に指摘しておいた。

本論は基本的に、原著者の恩師ツォンカパのDrang nges Legs bshad snying po『了義未了義の弁別・善説心髄』の注釈書であり、構成は同じく前半が唯識の章、後半が中観の章となっている。科文は『研究Ⅲ』p. 1-3に出しておいた。注釈書ではあるが、同書を敷衍するのではなくその種々の論点のうち、問題を含んだものをさらに詳しく論究しており、内容としてはツォンカパの『菩提道次第大論』「観の章」（『観の大論』）、『入中論釈・意趣善明』、『根本般若中論釈・正理大海』から多くものを承け、他の学者の主張の論破にも多くの文言が割かれ

ている。

まず序論の部分では、帰敬偈（H1b-）に続いて論書作成の目的、仏法僧が帰依処であることを述べる。次に龍樹の出現に関する予言が言及されるが、これは『意趣善明』『正理大海』の記述に倣っている。さらに、真実を探求することが正しい理由（H3b-）、深遠な空性を信解することの利益（H4b-）、その法をいかなる者に説くのかという器（H7b-）が論じられるが、これらは『観の大論』『意趣善明』を踏襲している。次に、本論の序分として了義・未了義の聖教の確認（H9b-）が、それぞれ『解深密経』と『無尽意所説経』に従うものとして提示されるが、これは『観の大論』と特に『善説心髄』に倣っている。

続く唯識の章（H10b-）は『善説心髄』に倣いつつ、特にツォンカパが同論において『摂大乗論』などにより経量部の学説に対する唯識派の学説の優位が明らかにされた点を称讃し、両学派の違いを認識論を通じてさらに詳しく論じている（H20a-）。またチョナン派の大成者トルプパ・シャーラブギェルツェン（Dol bu pa Shes rab rgyal mtshan. 1292-1361）や彼に従う者たちの他空説（gzhan stong）、当時チベットで「中観帰謬論証派」を自称した人たちの主張の矛盾を、唯識派の経論によって鋭く指摘している（H17b-, H31b-）ので、彼らの論書により関連する主張を紹介した。

続く中観の章（H34a-）の冒頭はおおく『善説心髄』と同様に中観の論師、論書の歴史を論じているが、さらに密教においても月称が最も重要な著者であることをタントラの註釈、成就者の言葉によって論証している（H38b-）。近代仏教学の観点からは中観の論師月称と密教行者の月称は別人とされるが、ここでも密教を上位に位置づけて顕教の学問を軽視しようとする傾向に対して、顕密を一つの大乗仏教、菩提道次第として取らえるこの学派の傾向が明らかである。

さらに中観学説の概論（H41a-）として、中観派の分類、帰謬論証派が世間極成派といわれることの意味が論及され、それによる空性の決択（H43a-）となる。そのうち、まず否定対象の確認、それを確認しないで否定する他者の立場の否定、自己の立場での否定対象の確認がなされている。これらは多くツォンカパの『観の大論』の内容をまとめながら議論している。

次に自立論証派の証因にとっての否定対象の確認では、『意趣善明』の記述に倣いつつ、さらに離一多の証因によって詳しく議論している（H75a-）が、この部分は後にセラ・ジェツンパも激賞している（cf.『研究Ⅲ』序文 p. 24）。

次に帰謬論証派の否定対象の確認が説かれる（H81b-）。多くはツォンカパに倣いつつも、同時代のサキャ派のロントン（Rong ston shes bya kun rig 1367-1449）の主張に対する批判も見られる（H88b-）。さらにそれから展開した意味が説かれるが、今回はそのうち、否定されるべき二我とそれを否定した二無我の説明（H95b-）までを翻訳、研究した。

全体としてツォンカパの主張とその典拠となる経論、批判される学者の主張のいくらかを新たに発見できた。さらに本書はツォンカパの著作とともにゲルク派の教学に大きな影響を与え、後代のゲルク派の大学者ジャムヤン・シェーペー・ドルジェ（1648-1722）やチャンキャ・ロルペー・ドルジェ（1717-1786）などの著作にも引用、論及されているので、『研究Ⅲ』の註にそのいくつかを指摘した。今後、文章そのもののデータ入力、検索も必要と思われるが、今回の翻訳、研究は今後のさらに広い研究のための一応の基礎作りができたと思われる。

本稿の作成に当たっては藤仲孝司氏にご協力を頂いた。

個人研究

社会変動のなかの儀礼慣行
－タイ農村の事例を中心に－

研究代表者　高井　康弘
（社会学）

研究員（高井）はかつて1985年から87年にかけて北タイ・チェンマイ市南方約30キロに位置する１農村で長期滞在調査を行なったが、タイ経済が急激な浮沈を経験した80年代後半からの15年は、短期訪問調査を3年に約２回のペースで繰り返し、事例村の状況を見守ってきた。本研究はこの長期観察作業の一環であった。本研究の現場調査は2000年７月28日から８月11日に行なったが、さらに、同年８月31日から９月17日、2001年３月８日から15日のタイ農村滞在期間中も引き続き資料収集を行なった。

現場調査では、まず生活様式・家族・農村内社会関係の概況を把握し、社会経済変動への村びとの対応状況を把握しようとした。つぎに、本研究は社会変動下の村びとの生の組織化と生活慣行・儀礼慣行の関連性を考察す

るものなので、食・住の生活慣行、および北タイ陰暦第12月の死者供養・得度祝い儀礼など幾つかの儀礼行事について重点的に聞き取り・観察を行なった。また伝統的慣行に象徴される既成の生の組織化をめぐる意識と態度を理解するための手がかりを、調査の際の住民との会話のなかに求め、最近15年間のその動態を理解・整理する枠組みを探ろうとした。とりあえずの知見は以下のとおりである。

(1)事例村住民の経済生活は大きく変化した。家電製品の普及に代表される消費生活の都市化がこの間急速に進行し、肥大する現金支出を埋め合わせるべく換金作物作の導入、農産物仲買、日雇い農業労働への傾斜が進んだ。稲作中心の半自給自足・安定志向の小農民的家族農業は、それでも事例村では90年代初めまで部分的に維持されていた。しかし、90年代中頃以降、稲作から果樹ラムヤイ（竜眼）作への転換が急速に進むなかで、小農民的家族農業は放棄されるに至る。2000年時点では、竜眼作への転換に伴う農業負担の減少と農外就労への一層の傾斜、高リスク高リターンで投機的色彩の強いコメ仲買、竜眼先物取引業への傾斜、薬剤を用いた着果促進による竜眼収穫の通年化による関連農業労働の通年化などの傾向がみられた。また、農業・農協銀行からの安易な資金借り入れが一般化しており、深刻な負債問題が潜在的に進行している状況であった。

(2)他方、農村社会のありようは次の点であまり変わっていないようにみえた。婚出入以外の社会移動はほとんど無く、地縁と血縁姻縁が重層する旧来の構成には変化が無かった。農外就労への傾斜のなか、村びとの経済活動範囲は空間的に拡大したが、こうした活動は旧来の農村社会の絆に沿って営まれていた。経済生活が市場の気まぐれな変化による影響を強く受け、不安定になった分、旧来の農村的絆は重要性を増しているようでもあった。各種儀礼行事や宴は従来同様、親族・近隣世帯間の互酬的関係の表現・確認の場であり、農村内道徳が依然重視され、実践されている様子がうかがえた。また現金収入の一定部分は功徳積みのための布施に投ぜられていた。金銭布施によって功徳を積み、それを故近親に回向する儀礼実践は、そのまま農村内道徳の実践でもある。現金収入が増加した分、宴費用負担・金銭布施額も増加している。そこでは、拝金主義と金銭布施と道徳実践の連関、つまり、市場経済下の高収入志向・都市的生活様式の受容が、農村的社会関係・農村仏教を維持・強化する構図が成り立っていた。

(3)ただし、就業形態の変化・就学熱の高まり・諸経費の肥大などの変化は、家族のあり方を次のように変えてもいた。たとえば、家族員は空間的に分散し、幼児と高齢者だけが地域に取り残されるのが昼間の風景になった。また、諸経費とくに教育費負担の関連から、夫婦が40歳代前半以下の世帯のほとんどは子供を一人しかもうけていない。村のベットタウン化・家族の少子化の進行は、諸慣行の意味付け、あるいは慣行の行方に影響するように思われた。儀礼行事は以前に増して家族や村の人びとが互いの関係やアイデンティティを模索・表現する貴重な機会になってきており、人びとはそのことに自覚的になりつつあった。また生活様式の都市化に伴い、人びとは他文化を経験するようになり、そのことが自慣行へのまなざしを変えつつあった。こうした変化のなか、現在、村の儀礼慣行はむしろ派手に盛んになってきている。しかし今後、さらに農外就労が一般化し、少子高齢化が進行した時、従来の農村的絆の機能は細り、農村内道徳・儀礼慣行のありようも大きく変化するのではないかと思われた。

以上が、2000年度の北タイ農村現場調査から得たイメージであり、拙稿「家族農業の放棄と農村的慣行の行方—タイの事例から—」（神戸大学社会学研究室『社会学雑誌』18号、2001年3月）の形で発表した。引き続き、タイ（東北部）・ラオス・日本での知見も交え、牛・水牛の飼育・肉食およびそれに関わる儀礼、葬送儀礼などに焦点を当て、上述した変化についての事例研究を進める予定である。

共同研究

多言語訳仏教文献を利用した初期モンゴル仏教の起源に関する文献学的研究

研究代表者　松川　節
（人文情報学）

本研究は、インド・チベット仏教圏の最北に位置するモンゴルにおいて、仏教がいかなる隣接文化圏を通じて伝播・弘通していったかを、多言語訳仏教文献の成立過程を追跡することによって文献学的に解明することを目的とするものである。

モンゴル仏典の研究は、19世紀中葉にシュミットShmidt、コワレフスキーKovalevskiらによって始められて以来150年以上の歴史をもつ。20世紀にはリゲティLigeti、ハイシッヒHeissigらが精力的に研究を行なった

が、日本でも、金岡秀友氏による仏教学的研究を嚆矢とし、庄垣内正弘氏、樋口康一氏による言語学・文献学的研究が行なわれた結果、世界でも高い研究水準を誇っている。

これに加えて、近年、ロシア、ドイツ、日本に各々将来されたモンゴル仏典の整理と研究が徐々に進められ、また、モンゴル国と中国各地の図書館に所蔵される文献も整理・公表されはじめたため、新たな資料状況が現出されたといっても過言ではない。

この中で特に注目に値するのは、今までほとんど現物が確認されなかった「古風な」、いいかえればその成立が元朝期に遡ると見なし得る仏典が、立て続けに出現したことである。しかも、それらの仏典は、モンゴル語訳のみが単独で伝存しているわけではなく、漢語・チベット語・ウイグル語の翻訳も伝存している。

こうした「多言語訳仏教文献」の写本・刊本を精査し、各言語テキストが相互にいかなる関係を有しているかを解明できれば、初期モンゴル仏教の成立において周辺（中国・ウイグル・チベット）の仏教文化がいかに関与したかをあきらかにできるはずである。

モンゴル仏典の翻訳起源については、チベット原典との比較を主とする樋口康一氏の一連の研究や、モンゴル語におけるウイグル語仏教用語の借用形態を言語学的に分析した庄垣内正弘氏の研究が知られており、初期モンゴル仏典の成立におけるウイグル仏典の影響についてもすでに指摘されている。しかしながら、ウイグル仏典を直接の翻訳原典とするモンゴル仏典は未だ見つかっておらず、また、漢語・モンゴル語・ウイグル語・チベット語などで存在する多言語訳仏教文献を用いてこの問題にアプローチする研究も存在しない。

これに対して研究代表者は、２つの仏教文献を選んで研究を行なった。ひとつは中国撰述『仏説北斗七星延命経』の漢文・モンゴル語訳・ウイグル語訳・チベット語訳各テキストであり、もうひとつは『布施王子本生譚』（Vessantara-jataka）のチベット語訳・モンゴル語訳各テキストである。

【研究設備】

研究目的であるテキスト蒐集とデータベース化を実現するため、海外調査に適したラップトップ型パーソナルコンピュータならびに周辺機器一式を購入し、調査先で活用した。

【海外調査】

2000年９月６日～22日までフランスのパリとロシアのサンクトペテルブルクに滞在し、写本・刊本調査を行なった。

パリでは国立図書館を訪れ、北京版チベット大蔵経カンジュル部に含まれるチベット語訳『仏説北斗七星延命経』を閲覧・調査した。周知のように、北京版チベット大蔵経カンジュル部には1410年の永楽版、1606年の万暦版、1684/92年・1700年・1717/20年の康熙版、そして1737年の乾隆版が存在しており、大谷大学図書館所蔵のものは康熙1717/20年版であり、パリ国立図書館のものは1737年の乾隆版である。それぞれは時代が下るにしたがって改版・補訂されていることがわかっている。閲覧に際しては、東洋写本部門のコーエン女史に便宜を計っていただいた。

ロシアのサンクトペテルブルクでは、２つの研究機関を訪問した。ひとつはロシア科学アカデミー東洋学研究所サンクトペテルブルク支所で、ここの図書館に所蔵されるモンゴル語訳『仏説北斗七星延命経』は、シャマニズム的な変容を受けた特異な文脈を有しており、モンゴルにおける北斗信仰の特殊性を示す貴重なテキストであることが判明した。もうひとつはサンクトペテルブルク国立大学図書館で、ここには17世紀前半に書写されたモンゴル大蔵経カンジュル部が所蔵されている。これに含まれる『仏説北斗七星延命経』テキストは、現存するモンゴル語訳のなかで最も古く、他のテキストよりも古風な要素を多数含んでいることが判明した。また、同大学図書館では、モンゴル語訳『布施王子本生譚』の３つのテキストを閲覧した。そのうちのひとつには、翻訳者が17世紀前半に活躍した有名な訳経僧シレートグーシ・チョルジワであると明記されていた。

訪問・調査に際して、ロシア科学アカデミー東洋学研究所サンクトペテルブルク支所のウスペンスキー氏に便宜を計っていただいた。

【研究成果】

現地で閲覧したテキストは、その場でパーソナルコンピュータに入力し、写真複写が可能なものについては撮影したうえで、帰国後にデジタル化した。チベット語訳『布施王子本生譚』については、本学大学院生である井内真帆君の研究補助を得てデジタル化した。

成果は、さしあたって校訂テキストの出版という形で公表する。『仏説北斗七星延命経』については、ドイツのペーター・ツィーメ氏と共著で2002年度中にドイツで出版される予定であり、『布施王子本生譚』については、モンゴル語訳テキスト訳註が、中国・内モンゴルのションコル氏との共著で2002年春に中国から出版される予定である。

東洋大学井上円了記念学術センター・大谷大学真宗総合研究所 共同研究「井上円了と清沢満之」報告

研究員　加来　雄之

井上円了（1858-1919）の「円」と清沢満之（1863-1903）の「満」を取って「円満研究」（命名は東洋大学前学長の神作光一氏であったと覚える）と略称されることになる共同研究を開催することが具体的に決定したのは1999年の秋ころであったかと思う。

訓覇曄雄大谷大学長・友田孝興真宗総合研究所長に対して、東洋大学井上円了学術記念センター（所長・新田孝司氏）の高木宏夫（前所長）・三浦節夫両研究員から、それぞれの大学の創立者である井上円了と清沢満之について共同研究しないかという提案がなされた。その後、次の宮下晴輝所長を中心として交流の方法、共同研究のテーマ、進め方などについて検討を重ね、第一回の共同研究会が2000年2月にもたれたのである。

満之が東京大学時代に円了と親密な関係をもっていたことはよく知られている。円了は東本願寺の第一回東京留学生の一人であり、満之は東京留学のおり円了を手本にし、万事相談するようにいわれていた。また留学時代の満之は、円了の創立になる東本願寺の留学生による「樹心会」においてともに宗門の未来を語り、これも円了の創立になる日本最初の「哲学会」に書記として参加し、さらに東洋大学の前身である「哲学館」（1887（明治20）年）創設評議員として参加、また教鞭もとったのである。このように二人には、同門以上の関わりがあった。その満之がやがて1901（明治34）年に真宗大学を近代的大学として東京巣鴨の地に開くとき、円了の助言がなかったと考えることの方が難しい。ところが、資料が少ないこともあり、満之が東京大学を離れてからの円了との交流については話題にされることさえほとんどなかった。

東洋大学は満之を知らず、大谷大学は円了を知らない。私自身も東洋大学が作成した『井上円了の教育理念』を読んで、それまでの円了のイメージを大きく変えなくてはならなかった。東洋大学と大谷大学という二つの私学がこのような状況を打破し、それぞれの建学の精神を明らかにするためにも円了と満之との呼応を問うべきであるという共通認識からこの研究会は出発したのである。

新潟の寺院の跡取りとして生まれ大谷派の僧侶でもありながら、宗門を出て広く世間に活動の場を求めた円了。名古屋の士族の家に生まれ、宗門の学校で学んだことを縁として宗門に短い人生を捧げた満之。この一見背反する二人を通底する課題を知ることによって円了と満之が当時の日本で、とくに哲学館の創立と近代的な真宗大学の開校によってなにを成し遂げようとしたかがより立体的に見えてくるに違いない。この二人の共通性は、命日を六月六日と同じくするだけではないのである。とにかく、この研究会は、急がずに、焦らずに、無理をせずに、お互いの理解を深めあうところから始めようということになった。第三回の共同研究会で「覚え書き」を交わすまでは正式名称もなかった。少し長いが共同研究の全体像をよくあらわしていると思うので以下に「覚え書き」を紹介し、あわせてこれまでの経過を報告しておこう。

「東洋大学井上円了記念学術センター・大谷大学真宗総合研究所　共同研究「井上円了と清沢満之」に関する覚え書き」

東洋大学と大谷大学はその創立期において歴史的に深い関係がある。その源泉は、東洋大学の井上円了と大谷大学の清沢満之という、二人の創立者の関係に見ることができる。

井上円了と清沢満之は、ともに真宗大谷派（東本願寺）に縁をもって成長し、明治維新後に本山に設立された教校に学び、さらに東本願寺の給費生となって東京大学哲学科をともに卒業した。

また両者は在学中に、その中心となって哲学会を設立し、明治20年に協同して私立学校「哲学館」（東洋大学の前身）を設立した。その後、清沢満之は京都の本山に帰り教学改革に携わり、明治34年に学寮から発展した真宗大学（大谷大学の前身）を東京巣鴨に開校した。哲学館の館主であった井上円了は、世界視察を経て大学へと志向し、のちに東洋大学に発展させた。

井上円了と清沢満之はともに明治時代を代表する教育者、哲学者、仏教者として活躍した。新たな思想を提唱する理論家であり、自ら構想をもってその実現を試みる実践家でもあり、日本と世界、人間と国家・社

会、時代と自己などの課題を、それぞれの立場から担い続けた人物である。

これまで、東洋大学と大谷大学はそれぞれの創立者について研究を進め、その成果を世に問うてきた。すでにみたように、井上円了と清沢満之にはそれぞれの固有性と共通性がある。そのことを踏まえて考えれば、東洋大学と大谷大学における両者の研究は、いままでの成果の交流と今後の共同研究によって、それぞれの研究の拡大と深化に大きな可能性がある。また、この共同研究は混迷する現代社会の諸問題に新たな視座を与える可能性があると考えられる。

このような認識から、東洋大学井上円了記念学術センターと大谷大学真宗総合研究所は共同研究「井上円了と清沢満之」を推進するが、さしあたってはつぎの方針ですすめることとした。

一　研究報告会は年に二回とし、交互に主催する。

二　研究資料については可能な限り相互交換をはかり、共同研究の基礎を形成する。

三　研究報告はそれぞれの機関誌などを活用して公表し、また最終成果をまとめて出版することを目指す。

四　共同研究の方針や運営などについては、双方の協議・決定を経て推進する。

五　共同研究の略称を「円満研究会」とする。

2001年５月19日

東洋大学井上円了記念学術センター

所長　新田幸司㊞

大谷大学真宗総合研究所　所長　吉元信行㊞

以上が「覚え書き」である。以下、今日まで開催された四回の共同研究について簡単に報告しておこう。

・第一回共同研究会

第一回は、2000年２月25日㈯・26日㈰の二日にわたって東洋大学の箱根にある豪華な温泉保養施設で開催された。大谷大学からは、延塚、池上、宮下、加来の四名が参加した。はじめての研究会ということもあり東洋大学の研究員に清沢満之を紹介するという趣旨のもと、延塚知道氏が清沢満之の人生と志願について基調発表を行った。はじめの会で緊張もあったがなごやかな雰囲気のなかで行われた。

・第二回共同研究会

第二回は、2000年12月９日㈯・10日㈰の二日にわたって、できたばかりの大谷大学湖西キャンパスセミナーハウスで行われた。第一日目は、渉成園で食事をとり、高倉会館、東本願寺を参拝し、その後、大谷大学の図書館を見学し、セミナーハウスに向かった。基調講演は東洋大学の田村晃祐氏による「円了の「中」と満之の「中」」であり、その後、懇親会をもった。二日目は基調発表の補足と質疑応答がもたれた。東洋大学からは11名が参加した。本学からは、宮崎、神戸、加来、宮下、池上、樋口、一楽が参加した。

・第三回共同研究会

2001年５月19日㈯・20日㈰の一泊二日で開催された第三回の共同研究会からは、東洋大学と大谷大学から一名ずつが発表することになった。会場は第一回共同研究会が行われた東洋大学の箱根保養施設である。第一日目は東洋大学の白山キャンパスと井上円了が構想し具現化した哲学堂を見学した。二名の発表者とその題目は次のようである。

桶谷秀昭「井上円了の人と思想」

安冨信哉「清沢満之の人と思想」

両名とも非常に幅広い視点からの発表で、東洋大学からの11名、大谷大学からの７名の参加者によって熱心な質疑が行われた。

・第４回共同研究会

第四回共同研究会は、2001年12月15日㈯から12月16日㈰の一泊二日で大谷大学の湖西キャンパスセミナーハウスで行われた。東洋大学からは、５名の参加者があった。本学の新しい総合施設・響流館を案内したのち、湖西キャンパスセミナーハウスに向かった。本学からは、吉元研究所長、宮崎研究所主事、安冨、樋口、加来が出席した。次回に続いて双方から一名ずつ、しかも東洋大学側が満之について大谷大学が円了について発表しようという趣旨でもたれた。第一日目は、三浦節夫氏による「清沢満之の前景と後景」の発表があった。氏は、清沢満之と井上円了の関わりを「三つのすれ違い」ということを軸として発表をされた。たとえば明治22年７月６日、満之は東京での研究生活をすてて京都の中学校の校長として赴任する。そのとき誰にも相談しなかったといわれる。その年、円了は６月８日に欧米視察に出かけている。もし円了が日本に居たならばどうであっただろうかなど二人の関係をさまざまな視点から問う興味深いものであった。その後、質疑応答が行われ、懇親会がもたれた。二日目は、樋口氏による「井上円了の真宗哲学の一考察」という発表があった。円了の『真宗哲学序論』に光を当て、同書が「嗚呼、南無阿弥陀仏」いう一句で結ばれることを指摘する印象深い発表であった。その後の話し合いで、2002年７月に東洋大学において第五回の共同研究を開き、哲学館の流れを汲む雑誌『新仏教』と満之の精神主義を宣揚した雑誌『精神界』という二つの仏教雑誌をとりあげること、さらにはこれまでの研究成果を出版のかたちでまとめることを確認して会を閉じた。

真宗総合研究所彙報　2001.4-2002.3

■「指定研究」研究会

国際仏教研究

＊国際仏教研究班研究会

議　題　「宗教相互間の理解における真理と歴史
—ひとつの予備的考察—」

講　師　ジョン・ロス・カーター氏（アメリカ・ニューヨーク州立コルゲート大学教授）

日　時　10月12日（金）16時40分～

場　所　第1研究室第1分室

仏教文献研究

パーリ語文献研究班

＊大谷大学図書館所蔵パンニャーサジャータカの文献的研究・第1回研究会

調査報告　「インド・オリッサ地方の仏教・ジャイナ教の遺跡について」

講　師　長崎法潤氏（本学名誉教授）

調査報告　「ラオスの上座仏教の現況」

講　師　田辺和子氏（東方研究会研究員）

日　時　4月20日（金）15時～

場　所　第5研究室分室

＊大谷大学図書館所蔵パンニャーサジャータカの文献的研究・臨時研究会

報　告　「タイにおけるパーリ語写本の現状について」

講　師　ピーター・スキリング氏（タイ在住パーリ語写本研究者）

日　時　5月30日（木）17時～

場　所　第5研究室分室

＊大谷大学図書館所蔵パンニャーサジャータカの文献的研究・第3回研究会

報　告　「東南アジアにおける上座部仏教の現状について」

講　師　池田正隆氏（本学非常勤講師）

日　時　6月15日（金）16時10分～

場　所　第5研究室分室

＊大谷大学図書館所蔵パンニャーサジャータカの文献的研究・第5回研究会

報　告　「東南アジアにおける上座部仏教の現状について・続編」

講　師　池田正隆氏（本学非常勤講師）

日　時　7月27日（金）16時10分～

場　所　第5研究室分室

＊大谷大学図書館所蔵パンニャーサジャータカの文献的研究・第6回研究会

報　告　「大谷大学所蔵貝葉写本研究の現状について」

講　師　畝部俊也氏（日本学術振興会特別研究員）

日　時　9月29日（土）10時～

場　所　第5研究室分室

＊大谷大学図書館所蔵パンニャーサジャータカの文献的研究・第7回研究会

議　題　「ビルマ現地調査報告—ビルマの仏教文化と過去仏崇拝—」

講　師　清水洋平氏（パーリ語文献研究班　研究補助員）

日　時　10月26日（金）14時30分～

場　所　第5研究室分室

＊大谷大学図書館所蔵パンニャーサジャータカの文献的研究・第8回研究会

議　題　「インドにおける写本研究の現状について」

講　師　Vasista Narayan Jha氏（インド・マハラシュトラ州立プーナ大学サンスクリット語高等研究所所長）

日　時　11月16日（金）16時10分～

場　所　第5研究室分室

＊大谷大学図書館所蔵パンニャーサジャータカの文献的研究・第9回研究会

議　題　「縁起経典における『識』と『名色』の相互因果の成立過程の研究」

講　師　舟橋智哉氏（パーリ語文献研究班　研究補助員）

日　時　12月14日（金）14時30分～

場　所　第5研究室分室

＊大谷大学図書館所蔵パンニャーサジャータカの文献的研究・第10回研究会

議　題　「大谷貝葉Mahapadumajataka考（中間報告）」

講　師　吉元信行氏（本学教授）

日　時　2月15日（金）14時30分～

場　所　第5研究室分室

＊大谷大学図書館所蔵パンニャーサジャータカの文献的研究・第11回研究会

議　題　「本年度の反省と来年度への展望」

日　時　3月18日（月）14時30分～

場　所　響流館真宗総合研究所会議室

現代思想研究

大谷大学FD研究班

＊2001年度第1回公開FD研究会
報　告　「自己生成的FD構築の試み」
講　師　石村雅雄氏（京都大学高等教育教授システム開発センター助教授）
日　時　5月11日（金）18時～
場　所　第4会議室

＊2001年度第2回公開FD研究会
報　告　「大学における構成主義教育の実践報告」
講　師　川田隆雄氏（本学助教授）
日　時　6月8日（金）18時～
場　所　第4会議室

＊2001年度第3回公開FD研究会
報　告　「導入教育のひとつの試み」
講　師　寺林脩氏（本学教授）
報　告　「授業観察をFDに繋げる」
講　師　石村雅雄氏（京都大学高等教育教授システム開発センター助教授）
日　時　6月27日（水）18時～
場　所　1110教室

＊2001年度第4回公開FD研究会
報　告　「みんなでミニシンポジウムやろうか？
—基礎セミナーにおける1つの試み—」
講　師　岡田伸夫氏（京都教育大学教育学部教授）
日　時　7月25日（水）18時～
場　所　第5会議室

＊2001年度第5回公開FD研究会
議　題　「当日ブリーフレポート方式による講義の進め方」
講　師　宇田光氏（松阪大学教授）
日　時　10月26日（金）18時～
場　所　第4会議室

＊2001年度第6回公開FD研究会
議　題　「小規模文系大学における自主ゼミの試み
—FDから導入教育まで—」
講　師　中村博幸氏（京都文教大学助教授）
日　時　11月30日（金）18時～
場　所　3101教室

＊2001年度第7回公開FD研究会
議　題　「基礎演習のシミュレーション—アイディアの拡散・抽出・討論—」
講　師　中村博幸氏（京都文教大学助教授）
日　時　12月14日（金）18時～
場　所　1112教室

〔補　遺〕

＊2000年度第8回公開FD研究会「What to Teach and How to Teach—授業改善模索中—」の講師は岡田伸夫氏（京都教育大学教育学部教授）です。

＊2000年度第9回公開FD研究会
報　告　「《ユニバーサルアクセス時代》の大学教育－構成主義教育とIT技術の融合－」
講　師　川田隆雄氏（本学助教授）
日　時　1月26日（金）18時～
場　所　第5会議室

本来ならば『研究所報』第39号に掲載すべきところですが、ここに追記致しますと共に、関係者に深くお詫び申し上げます。

大谷大学データベース研究班

＊第6回研究会
報　告　「デジタル画像のデータフォーマット」
講　師　柴田みゆき氏（本学専任講師）
日　時　4月20日（金）17時50分～
場　所　第5会議室

＊第7回研究会
議　題　「日本史史料デジタル化の諸問題」
講　師　草野顕之氏（本学教授）
日　時　6月8日（金）17時50分～
場　所　3101教室

＊第8回研究会
議　題　「IT化と博物館の情報化」
講　師　赤尾栄慶氏（京都国立博物館主任研究員）
日　時　6月29日（金）17時50分～
場　所　第5会議室

＊第9回研究会
議　題　「デジタル画像のデータフォーマット」
講　師　柴田みゆき氏（本学専任講師）
日　時　11月2日（金）17時50分～
場　所　尋源館会議室

＊第10回研究会
議　題　「清沢満之自筆原稿のデジタル化に関わる諸問題」
講　師　加来雄之氏（本学助教授）
日　時　12月28日（金）16時～
場　所　3101教室

■学会参加／出張／調査派遣

仏教文献研究

西蔵文献研究班

＊「北京蔵学討論会」参加とマムド地方のチベット寺院調査

期　間　7月23日（月）～8月6日（月）
出張先　北京、西寧（中国）
出張者　白館戒雲（研究員）

パーリ語文献研究班

＊世界平和パコダの長老よりのパーリ語文献に関する専門的知識の聴取調査並びに資料収集
期　間　4月14日（土）～15日（日）
出張先　世界平和パコダ（北九州）
出張者　吉元信行（研究員）

＊パーリ学仏教文化学会第15回学術大会
期　間　5月26日（土）
会　場　愛知学院大学日進学舎（日進）
参加者　長崎法潤（嘱託研究員）・舟橋智哉（研究補助員）・清水洋平（研究補助員）

＊日本印度学仏教学会第52回学術大会
期　間　6月30日（土）～7月1日（日）
会　場　東京大学（東京）
参加者　長崎法潤（嘱託研究員）・舟橋智哉（研究補助員）

■一般研究・共同研究

佐賀枝班

＊大谷派慈善協会『救済』の閲覧調査
期　間　6月1日（金）
出張先　堺女子短期大学図書館（堺）
出張者　佐賀枝夏文（研究員）

＊東海印度学仏教学学会第47回学術大会・シンポジウム
基調報告　「仏教と福祉」
期　間　7月7日（土）
会　場　同朋大学（名古屋）
参加者　吉元信行（研究員）

■東洋大学井上円了記念学術センター・大谷大学真宗総合研究所共同研究「井上円了と清沢満之」

＊第3回共同研究会
報　告　「井上円了の人と思想」
講　師　桶谷秀昭氏（東洋大学教授）
報　告　「清沢満之の人と思想」
講　師　安冨信哉氏（本学教授）
日　時　5月19日（土）～5月20日（日）
場　所　東洋大学箱根保養所（神奈川県足柄下郡）

＊第4回共同研究会
議　題　「清沢満之の前景と後景」
講　師　三浦節夫氏（東洋大学井上円了記念学術センター専任研究員）
議　題　「井上円了の真宗哲学の一考察」
講　師　樋口章信氏（本学助教授）
日　時　12月15日（土）～12月16日（日）
場　所　大谷大学湖西キャンパスセミナーハウス

■真宗総合研究所委員会

＊第1回委員会
議　題　客員研究員の認定について
　　その他
日　時　7月12日（木）12時10分～
場　所　第3会議室

＊第2回委員会
議　題　①客員研究員の認定について
　　②2002（平成14）年度「一般研究」の選考について
　　③その他
日　時　10月30日（火）14時30分～
場　所　第3会議室

＊第3回委員会
議　題　①客員研究員の認定について
　　②紀要19号の編集について
　　③その他
日　時　3月8日（金）12時10分～
場　所　尋源会議室

＊第4回委員会
議　題　①2002（平成14）年度研究所体制について
　　②その他
日　時　3月27日（水）16時00分～
場　所　第3会議室

■「指定研究」推進研究事務担当者連絡会

＊第1回連絡会
議　題　①2001年度の予算について
　　②2001年度の事務手続きについて
　　③その他
日　時　4月25日（水）12時10分～
場　所　第3会議室

＊第2回連絡会
議　題　①研究所移転準備について
　　②その他
日　時　12月18日（火）12時10分～
場　所　第3会議室

■「指定研究」チーフ及びキャップ・庶務連絡会

＊第1回連絡会
議　題　①2001年度の研究体制について
　　②その他

日　時　4月11日（水）16時10分～
場　所　第5会議室
＊第2回連絡会
議　題　2001年度の研究状況報告について
日　時　2月14日（水）13時～
場　所　第4会議室

■人事
＊2001年4月1日付をもって、研究所嘱託事務員が大橋由美子から青木ゆきに交替した。
＊2002年2月28日付をもって、研究所嘱託事務員の青木ゆきが退職した。

■客員研究員
＊Hamar Imre
国　籍　ハンガリー共和国
現　職　エオトヴェシ・ローランド大学準教授
研究期間　2001年8月23日～2002年2月22日
研究課題　華厳経注釈よりみた日本仏教
指導教員　小川一乗教授
＊William S. Waldron
国　籍　米国
現　職　ミドルベリー大学助教授
研究期間　2001年9月1日～2002年6月30日
研究課題　仏教より見た精神生態学に関する研究
共同研究者　宮下晴輝教授

研　究　所　報　第40号
2002年3月29日　発行
編集発行　大谷大学真宗総合研究所
〒602-0802　京都市上京区寺町通今出川上ル二丁目鶴山町8番地
Tel. 075-212-5500　Fax. 075-212-5501